

タイトル	ワマン・ポマ著女澤史恵訳『インカ王族の子孫の記録者による挿絵』(1) インカ帝国民族資料監修
著者	大場，四千男；OBA, Yoshio
引用	北海学園大学学園論集(146)：127-194
発行日	2010-12-25

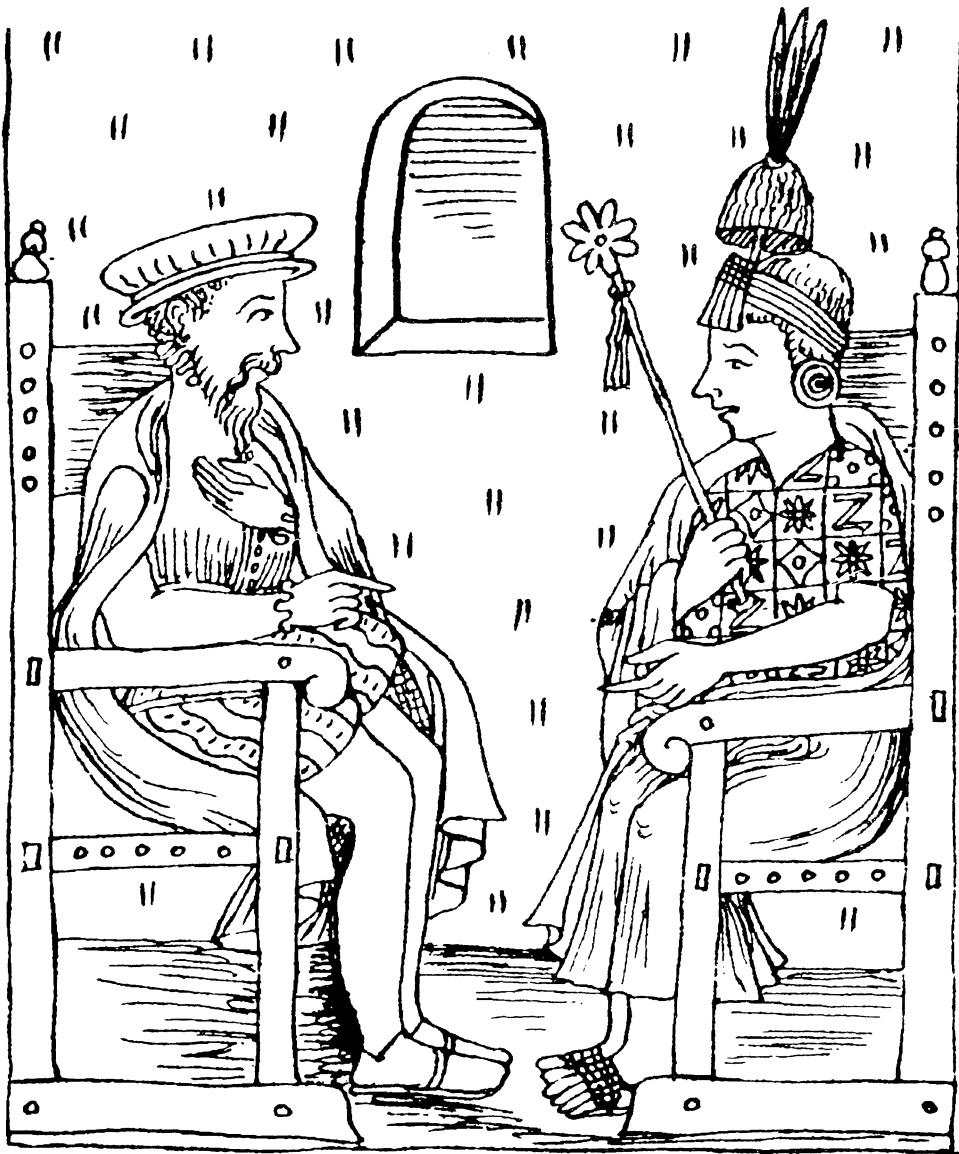
ワマン・ポマ著 女澤史恵訳
『インカ王族の子孫の記録者による挿絵』(一)

インカ帝国民族資料監修 大 場 四 千 男

目 次

- 序 文
- 第一編 アンデス古代史
- 第二編 インカ帝国の国王と王妃
- 第三編 インカ帝国の部将
- 第四編 インカ帝国の年間行事と儀式
- 第五編 インカ帝国の宗教と葬式
- 第六編 インカ帝国の刑罰と祭り
- 第七編 インカ帝国の行政官と巡察使

The Drawings of the Indian Chronicler Los Dibujos del Cronísta Indio FELIPE GUAMAN POMA DE AYALA



New Chronicle and Good Government
Nueva Crónica y Buen Gobierno

序 文

ワマン・ポマ (1535-1615) の人物紹介

インディオの記録者フェリペ・ワマン・ポマ・デ・アヤラが世間に知られるようになったのはごく最近になってからで、1908年にデンマークのコペンハーゲン図書館で図書館長リチャルト・ピーチュマンが挿絵入りの原稿を発見した後のことである。このような予期せぬ場所での発見は、どのようにして原稿がそこに届けられたのか、さまざまな推測を引き起こす。最も有力視されているのは、アメリカ大陸から送付された書類が保管されていたスペインのオリバーレス公伯爵の図書館にあったという説である。その図書館の一部は、1650年から1662年までスペインに駐在していたデンマーク大使コルネリウス・ペンダーソン・レルヒに購入された。のちに彼はその原稿を自国に持ち帰ったが、1936年にパリの民族学の研究機関の2人の専門家によって出版され、広く世間に知られるようになった。ワマン・ポマの原稿に記載されている短い自伝以外に、彼の生涯について記載してある文献は知られていない。この著書には、年代の間違い、食い違い、矛盾も散見されるが、だからといってペルーの歴史を理解する上でその重要性が低下するものではない。

フェリペ・ワマン・ポマ・デ・アヤラは、1535年あるいは1536年に、アヤクーチョ県ルナカス地方のサン・クリストバル・デ・ソンドンド村で生まれ、そこに住居や財産を所有していたと主張している。しかし、ワヌコで生まれたとする歴史家もいて、そこは副官としてインカに仕えた祖父が、ヤロビルカ家の君主として治めた土地だった。ポマの父マルティン・ワマン・マルキは、インカの支配下で独自の習慣を保持していたチンチャイスーユの統治者ヤロビルカ・インディオの子孫であった。

母はインカ皇女ワナ・クリ・オクリョだったことから、ポマはインカ・トパック・ユパンキの子孫であると考えられている。ポマには、三人の兄弟と一人の姉妹の他に、母親とスペイン人征服者ルイス・アバロス・デ・アヤラとの間に生まれた混血の異父兄弟、マルティン・デ・アヤラがいた。この混血の兄弟は司祭になり、ワマン・ポマの知的発展に多大な影響を与えた。ポマ自身以下のように記述している。「神父マルティン・デ・アヤラは義父、母、兄弟たちに知識を伝授し、こうした教えのおかげで、著者はこの年代記を書くことができたのである」と。

こうした兄弟との関わりを通して、ワマン・ポマは読み書きを学び、聖書や法律、歴史の知識を得て、さらに絵を描く技術も習得した。不完全ではあるが、ポマの知識はインディオとしては非常に優れており、特にこの時代にペルーに渡来したスペイン人の圧倒的多数は、こうした教育に欠けていた。正確な年代はわからないが、ワマン・ポマは幼児期をクスコで過ごし、その後、

混血の兄弟、神父マルティン・デ・アヤラが牧師を務める地方病院のあるワマンガへ移り、一緒に暮らした。ワマン・ポマの父親もその病院で働いていた。ポマはスペイン語とケチュア語、その他の方言ができたので、論争や刑事あるいは民事訴訟で通訳者として活動し、また植民地法や特に副王トレドの導入した統治制度についての知識があったので、貧しいインディオに助言することができた。ワマン・ポマはワマンガ地方に滞在していたが、ペルーを旅してまわり、クスコ、ワヌコ、ワンカヨ、ワンカベリカやリマへ向かう途中の沿岸地方を訪れている。

ワマン・ポマは結婚していて、彼の著書に登場するので、少なくとも一人は子どもがいたことがわかる。この記録者はペルー中を旅してまわり、貧しいインディオの保護に尽力した。この年代記を書きあげるのに、1583年から1613年までの30年の歳月を費やした。彼は冒険と波乱に富んだ人生を送り、80歳あるいはそれ以上生きたと考えられている。クレメンツ・マーカム卿は著書「インカの歴史」でワマン・ポマの作品と生涯に触れ、「この年代記の特筆すべき特徴は、圧倒的優位な立場のスペイン人による非情な専制政治について明らかにし、大胆にも非難していることである」と述べている。この画家で文筆家の彼は、司祭も役人も容赦なく批判している。挿絵からは、鞭に打たれ、棒で殴られ、足から逆さ吊りにされた人々を見て取ることができる。そこには二個の卵を貢納しなかったとして、裸で鞭打たれる女性が描かれている。女性に対する劣悪な待遇、子どもへの非人道的な殴打、強制結婚、役人とカードゲームに興じる司祭などについて記載されている。

この年代記はフィリペ二世に宛てて書かれている。著者は苦勞してこの原稿をリマに持って行き、そこからスペイン本国に送付され、インディオの保護者として認知されたいと願っていた。どのようにして、この本が破棄されることなく、スペインへの送付が許可されたのか、非常に謎めいている。不幸な同胞に同情の念を抱き、あらゆる情報を明らかにすることに関心のあった、この著者がどうなったのか、当然知りたいと思うだろう。彼は優れた画家であり、大胆不敵にも不法行為や残虐行為を描写した。風刺の精神が挿絵から伝わってくる。先住民の才人によって編み出された著書として、これほど興味深く貴重なものはないだろう。

ワマン・ポマの著書の時代背景

ワマン・ポマの著書を完全に理解するためには、年代記で言及されている歴史的出来事を考慮することが極めて重要である。スペイン人がやってくる直前には、クスコのワスカ王とキトの異母兄弟アタワルパ王が王権相続をめぐる紛争しており、インカ帝国は揺れていた。結局、アタワルパが勝利し、ワスカとその家族、親戚を殺害した。これは正統性と継続性の原則に反する行為で、インカ社会が内包する不安感を増幅させた。

この深刻な危機だけでなく、インカによる処遇を快く思っていなかったカナリス、チャチャボヤス、ワンカスなどの民族集団からスペイン人が軍事的援助を受けたことが、最終的にインカ帝国の滅亡を招き、その領土は短期間で征服されてしまった。手っ取り早く富を手に入れようとする征服者の野心によって、征服者間に紛争が起きた。こうした内紛によって、スペイン王室は介入せざるを得ない状況となり、ペルー初代副王と初期の征服者フランシスコ・ピサロとディエゴ・デ・アルマグロの死を予兆させた。当初スペイン人は安易に略奪を行い、インカの宮殿や寺院から金銀を持ち去ったが、その後スペイン王室はペルーの鉱山資源を開発し、その土地を占領するため、組織的体系を導入した。スペイン王室が征服者に命令を下す「エンコミエンダ」制度を創設し、インディオに福音を説き救済するために、インディオ集団の統括者として征服者を任命した。そのため、インディオは貢納として食料を提供し、水は薪を運送し、住居や教会、道路、橋、水路を建設し、その他公共の仕事を請け負わなければならなかった。スペイン王室は「ミタ」制度も導入し、鉱山で働く労働者を共同体や村から提供させた。こうした強制動員は、偽装されてはいるが、要するに奴隷制度を生み出した。鉱山で束縛されずに働いたインディオもわずかながらいたが、非人間的な労働条件と社会的保護の欠如のため、驚異的な数の鉱山労働者やその家族が、死亡したり病気になった。もう一つの見え透いた搾取は織物作業所で行われ、そこでは女性や子どもが過酷な労働を強いられ、時には劣悪な待遇から逃げ出さないように鎖で繋がれることもあった。

スペイン人は搾取と人口制限に都合のよい制度を強要した。ペルーの最高権威者である副王を筆頭に、官僚が各地を統治した。スペイン国王に選出された官僚は、行政と司法の役割を遂行した。実際、官僚らはエンコメンデーロ（委託を受けた人物）と結託してインディオを抑圧し、搾取した。こうした搾取の構造には、司祭や伝道師、インディオの首長らも含まれていた。貧しいインディオから搾取する見返りに、利益や便宜を得ようとして、首長らはスペイン人に協力した。スペイン人に協力しないインカの支配層や首長らには、さまざまな妨害が加えられたためであるとポマは書き記している。また、先住民の墮落を招くので、混血は好ましくないと示唆している。ポマはもう一点、司祭が貧しい人々を救済するというキリスト教徒としての任務を果たしておらず、官僚たちはスペイン王室の法律に従っていないことを指摘している。こうした状況を打破するために、ワマン・ポマはスペイン国王に宛ててこの著書、つまり「新しい記録」と「良き統治」を書いた。その中で、インディオたちはスペイン人や黒人と混ざり合わずに、それぞれが独自の社会で暮らしていれば、もっと効率的に発展するだろうと次のように述べている。

「インディオは古代有力者の子孫に統治され、徳と知性のある人物が選出されるべきである。先住民の土地や所有物は彼らに返還されるべきで、教育は、古代インカの支配が完全に消滅してしまった今となっては、正統な君主として認知されているスペイン国王の支配下で改善されるべき

であるとしている。」さらにポマは宗教改革も提唱し、司祭は人間的な資質や品行に基づいて選出されるよう改善すべきであるとしている。ポマは、貧しい人々への献身とキリスト教徒としての美德という点で、フランシスコ会士やイエズス会士を賞賛している。彼の理想とする美德や社会は、キリスト教の人間愛に深く根ざしており、インディオの保護に尽力したラス・カサスらを称えている。彼らは、世界中の民族がみな平等であるという説を推進するごく少数派であり、征服と先住民の服従を観念的に正当化するために教義を利用し、絶対君主の権力とともにある教会の実態に異議を表した。ポマが指摘しなかった点に、インディオ社会の支配階層がインディオに対して行った搾取が挙げられる。それは倫理的問題からだけでなく、スペイン君主が導入した政策、つまり組織的な暴力に依存した屈折した支配システムによって生じた問題だったからである。こうした矛盾を含んでいるので、ポマは一方ではインカ王族、征服者、スペイン人有力者、司祭、首長らを批判しながらも、他方では理想的な君主と、正義と良き統治に裏打ちされたキリスト教徒の美德の規範となる教会が存在すれば、インディオの不正問題と搾取問題は解決されると考えている。

しかし、ヨーロッパでもスペイン王室と教会との連携によって、アメリカ大陸ほどではないにしても、貧しい人々が抑圧されているという事実、ポマは気付いていなかった。こうした状況からプロテスタントの宗教改革(1517年)へと発展し、それに続いて内戦や革命が生じ、自由と正義を求めてヨーロッパは大きく揺らいだ。この揺らぎの波はインカ征服後のペルーにおいても生じるのである。

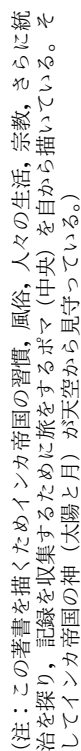
この著書には矛盾や間違いが散見されるものの、ワマン・ポマの提唱する改革は、最貧民のために立ちあがった聖書の登場人物、預言者アモスやイザヤを連想させる倫理的基盤に根付いている。この年代記を通して、声なき無防備な民に対する作者ポマの深い慈悲を感じるだろう。彼の意見は時代を先取りしており、植民地支配下では最弱者であった女性や子どもの待遇に対して、懸念を表明した。ワマン・ポマは、ペルーにおいて、キリスト教徒である哀れなインディオへの愛情と懸念から、いわゆる「自由主義神学」を要求した先駆者だったとも言えるだろう。ワマン・ポマの著書は、スペイン人による征服以前の時代と、征服や植民地時代の再現から成っている。

長い放浪の旅を通して、記録者ポマはペルーでの社会情勢を目の当たりにし、スペイン人による征服以前の口承伝統について多くの情報を収集した。カトリック教徒の視点から見ても、ポマの描く挿絵を通して習慣、宗教、経済、社会生活の一般概念、例えば古代ペルー住民の宇宙観などを理解することができる。また、ポマはチチャを飲み、コカの葉を噛む習慣、そして偶像崇拝を批判しているが、また同時に、スペイン人の野望とキリスト教徒としてのあるまじき行動をも非難している。彼の判断基準は、彼の理想として表明している厳格なカトリック教の道德規範に

基づいており、彼の描いていた豊かな観念的世界を裏付けるものである。ちょうど二つの文化が
出会って大きな変化の生じた時代であり、相互に混ざり合って、新たな国家が誕生した。ワマン・
ポマの著書は長編であり、最も興味深い特徴は、挿絵に添えられた文章よりも、より明確に表現
している挿絵そのものにある。

こうした挿絵からヒスパニック社会、つまり征服と植民地どちらの様子も簡単に窺い知ること
ができる。このポマの作品は 16 世紀から 17 世紀初頭の生活に関連する習慣や儀式、情景、登場
人物の載っている記録書としても意義がある。さらに、ポマはインカ社会の口承伝統や歴史的記
録を描くことによって、スペイン人による征服以前の社会をも再構築している。人々は死を拒絶
し、共同体の信仰に従い、世代を超えて脈々と生き続ける。これがアンデス文化の精神の真髄で
ある。自書の中でワマン・ポマはこう書いている。「この本を読んで、涙を流す者もあれば、笑う
者もいるだろう。神に捧げる者もいれば、怒りのあまり破り捨てようとする者もいるだろう。そ
して、この本を手元に置いておきたいと思う人もいるだろう……」、と。

マルティン・ブラボ





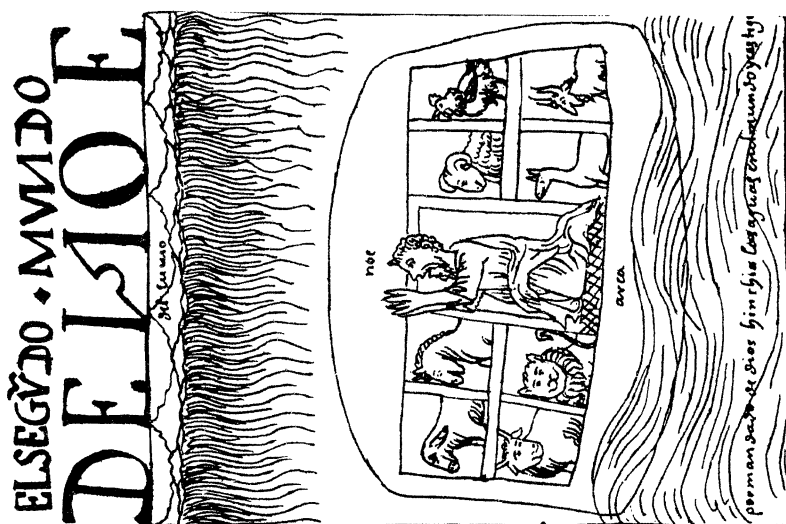
天地創造

神は6日間でこの世界とアダムとイブを創造した。世界を救うために33年間働いた。キリスト教徒の読者よ、神が人間に施した驚異と恩恵を見るがいい。



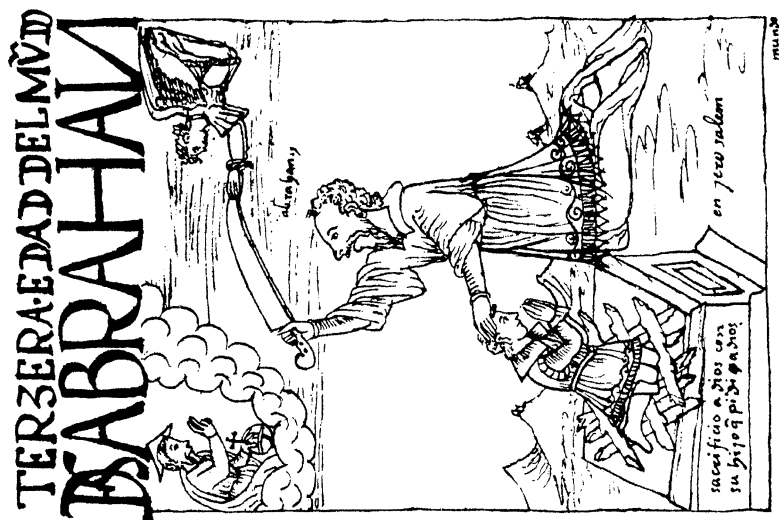
最初の世界、アダムとイブ

最初の人類は、神に創られたアダムとイブだった。彼らは多くの子孫を残し、その子孫も多くの子孫を残し、人口が増えた。



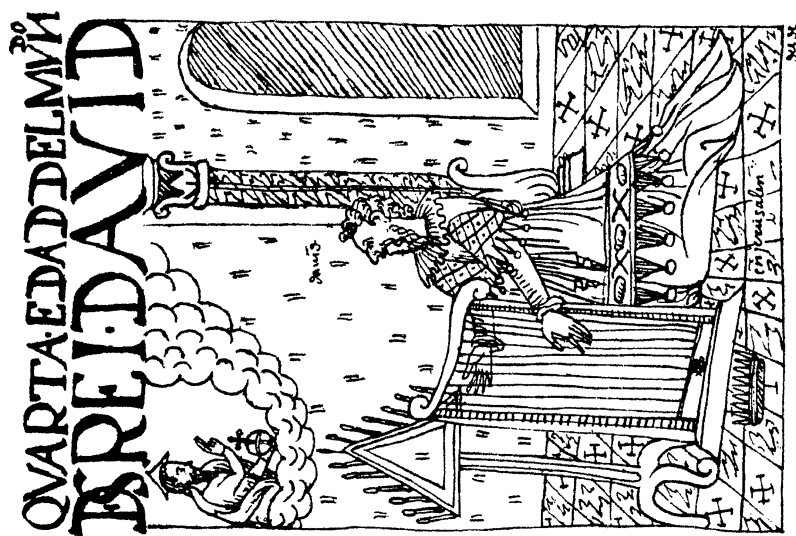
2 番目の世界、ノア

神は罰として洪水を起こした。ノアは方舟を造り、神は40日間屋も夜も雨を降らせた。ノアは方舟を降り、ブドウを栽培し、ワインをつくって飲んだ。世界は神を信じるのを止め、多くの罪を犯す人々であふれた。ノアの息子の一人がアメリカ大陸にやってきたと言われている。インディオはアダムの子孫だとも言われている。神のみが真実を知っている。



3 番目の世界、アブラハム

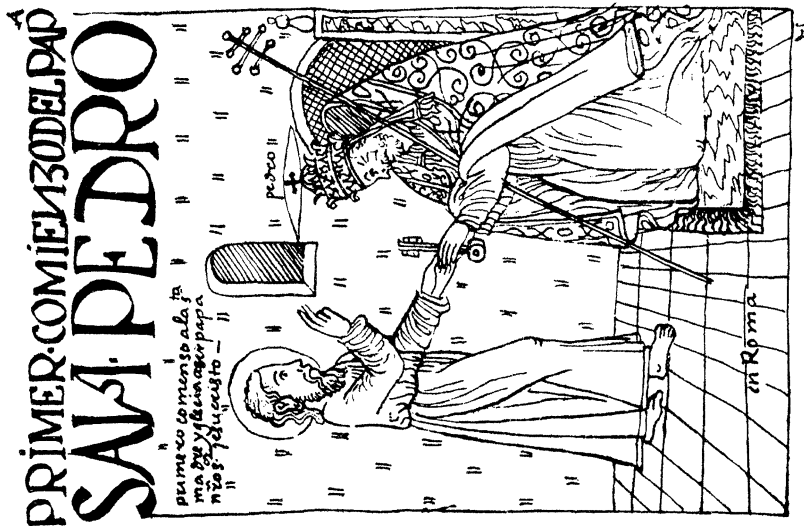
神はエルサレムでアブラハムに息子を生贄として捧げるよう命じた。アブラハムは子孫を残し、救世主であり、神の生ける息子、イエス・キリストへと続いている。このためイエス・キリストはアブラハムの直系の子孫だと考えられている。



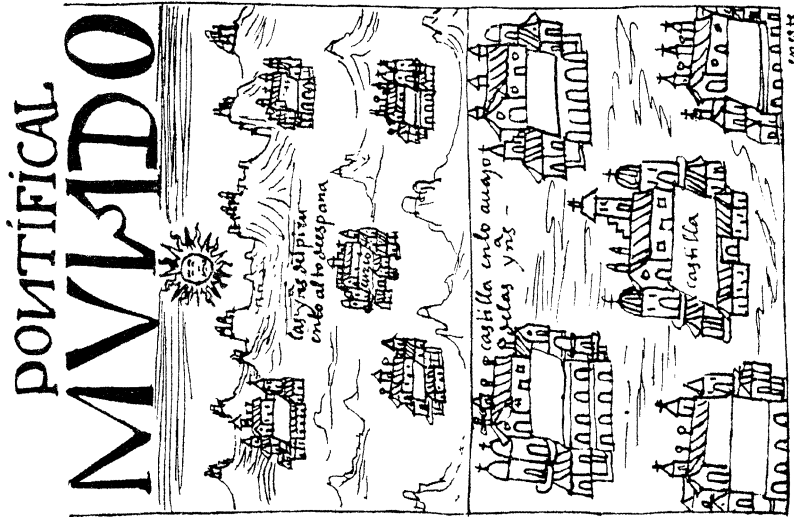
4 番目の世界、エルサレムのダビデ王
この時代には、多くの王や地主が反乱をおこし、多くの富を手に入れ、欲望のためには、神を忘れ、悪魔を受け入れた。この時、正義をもって統治することを学び、芸術や貿易が発展した。



5 番目の世界、イエス・キリストの誕生
マリアとヨセフは赤ん坊イエスを授かり、エルサレムで生まれました。この時代の主要な出来事は、救世主イエス・キリストの誕生である。

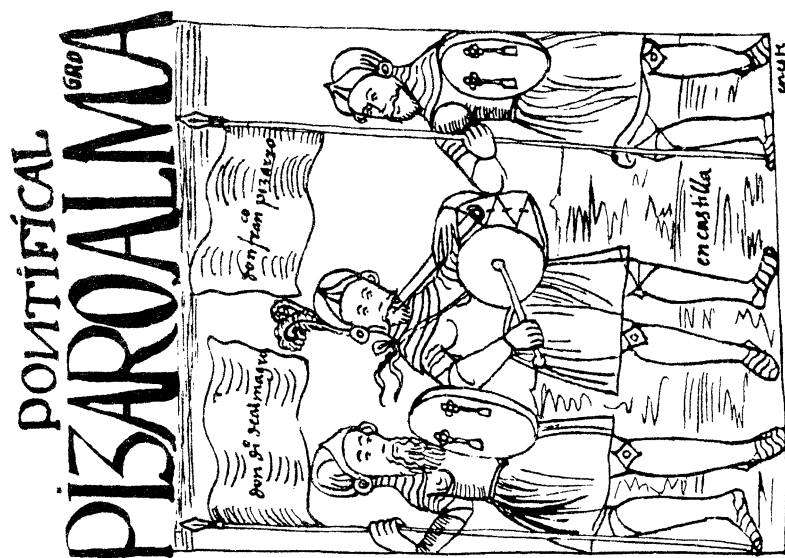


初代ローマ教皇聖ペトロの任命
イエス・キリストが神の代理人となったのが始まりで、キリストは12使徒のひとり聖ペトロを地球上での代理人として残した。

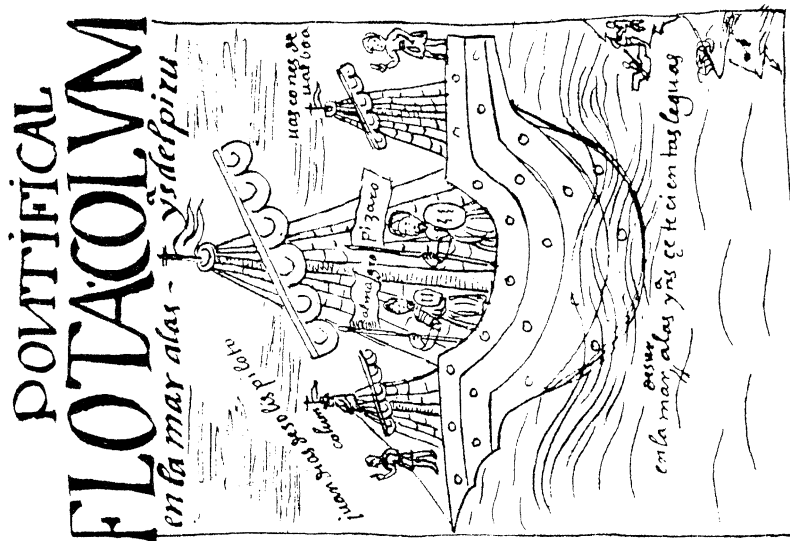


教皇の世界

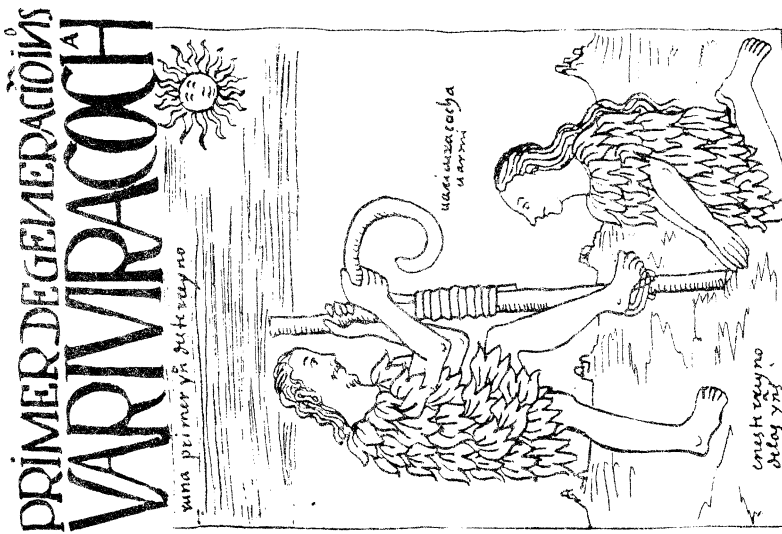
ペルーのインディオの街が発見され、この時にスペインとローマはペルーについての情報を得た。ヨーロッパではアメリカ大陸の豊かさに気付いていなかった。彼らはこの大陸を発見して、地球が丸いことを知った。



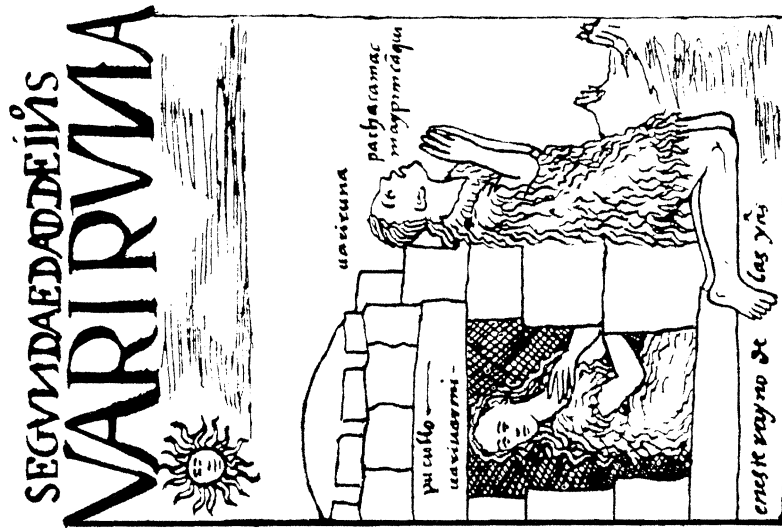
カステイリーヤにいるドン・ディエゴ・デ・アルマグロとドン・フランシスコ・ピサロ
この時代にスペイン人のキリスト教徒が出航し、2人の隊長ディエゴ・デ・アルマグロとフランシスコ・ピサロと司祭フレイ・ヴィンセントが172人の兵を従え、トゥンベスの港に到着した。この征服者たちは三位一体、聖母マリア、聖人、天使に守られていた。



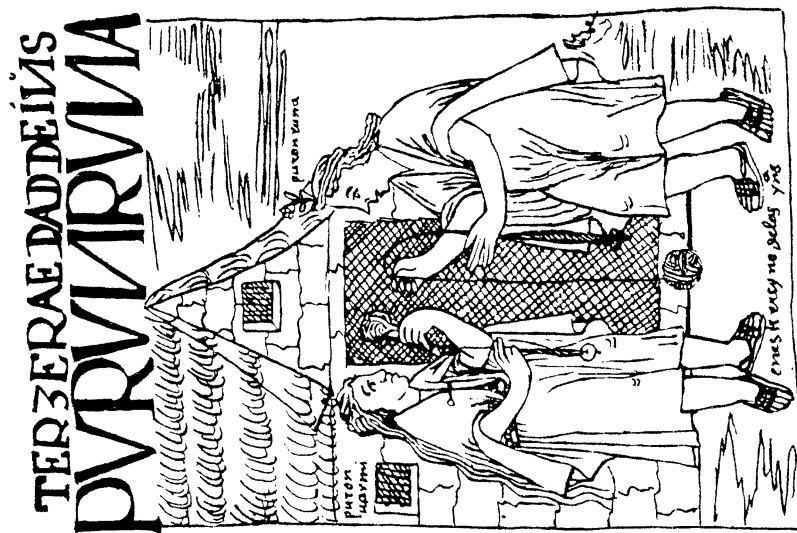
ペルーのインディオに向かって進むコロンプスの艦隊
フアン・ディエゴ・デ・アルマグロ (コロンプス), バスコ・デ・バルボア, アルマグロ, ピサロらが乗船していた。トゥンベスの港に上陸して、インカに使者を遣わす計画だった。けれども、金銀の宝庫であるのを見た彼らは拝金主義者となり、インカ皇帝アタワルパを捕えて殺した。



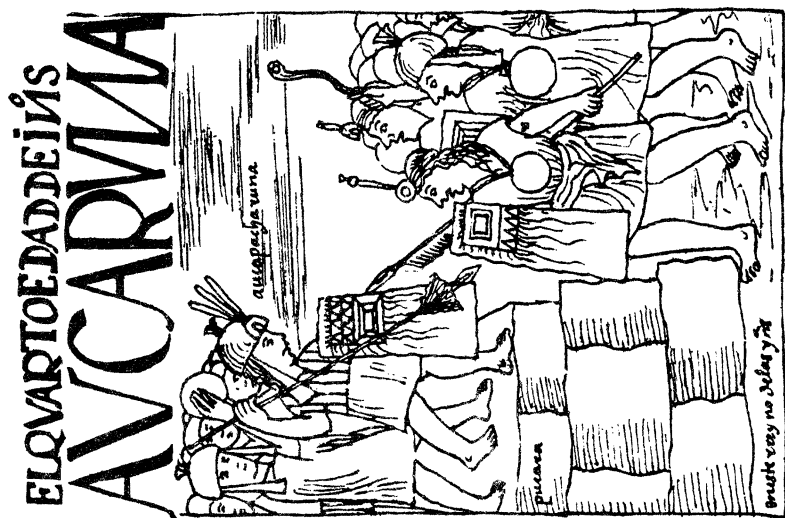
ワリ期の初代インディオ、ワリコチャ（ワリウィラコチャルナ）
衣服の作り方を知らず、葉を身にまとい、洞窟や岩山に住んでいた。アダムのように土を耕し始めた。彼らの仕事は、神に祈ることだった。争いはなく、仲良く平和に暮らした。



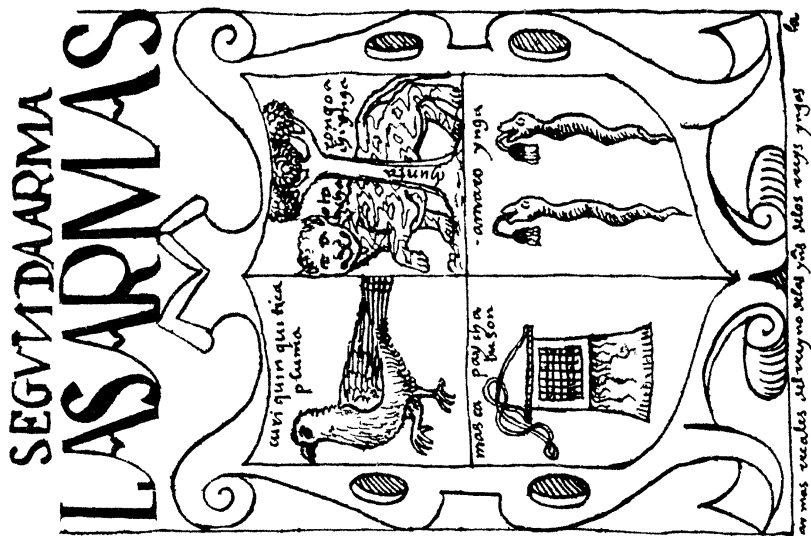
第2代インディオ、ワリルナ
農場や段々畑、用水路をつくった。炉のような小さな家を建てた。天国に唯一の神イラバがいると信じていた。



第3代インディオ, プルンルナ
染めた糸で色鮮やかな織物を織るようになり, 家畜を育て, 金や銀を探し出した。
泥のレンガの壁の家を建て, 屋根には藁をのせた。彼らはノアの子孫で, 洪水の
後繁殖したワリコチャとワリルナの子孫である。

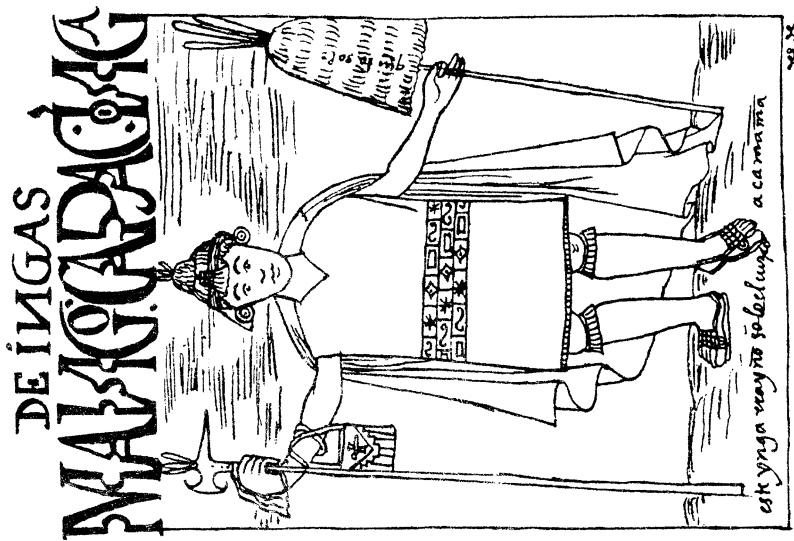


第4代インディオ, アウカルナ
要塞や家, 井戸をつくるようになった。いくつもの戦争が繰り広げられ, あちこ
ちで流血の惨事が起きた。この5300年続いた4つの時代の後, インカがこの国に
現れ, 権力者となった。

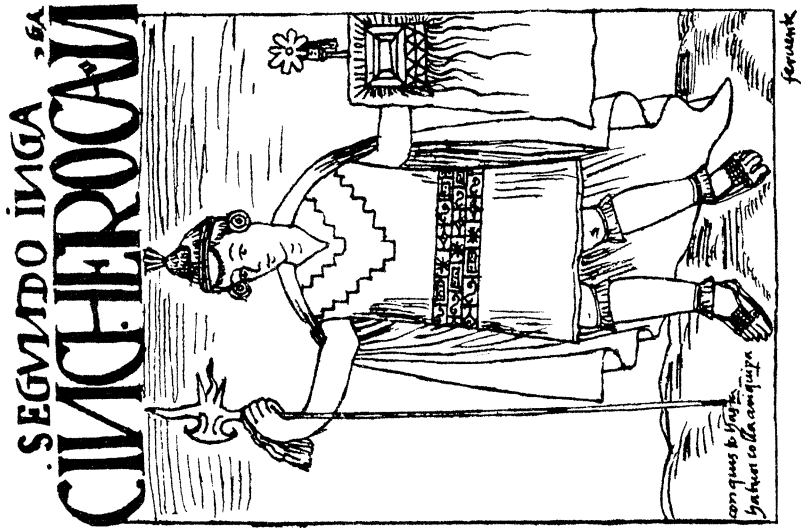


インカの紋章
ワシの羽、ジャガー、王冠、蛇が描かれていた。インカはティティカカ湖とティ
アワナコ出身で、そこから8人の兄弟がクスコに現れたと言われている。

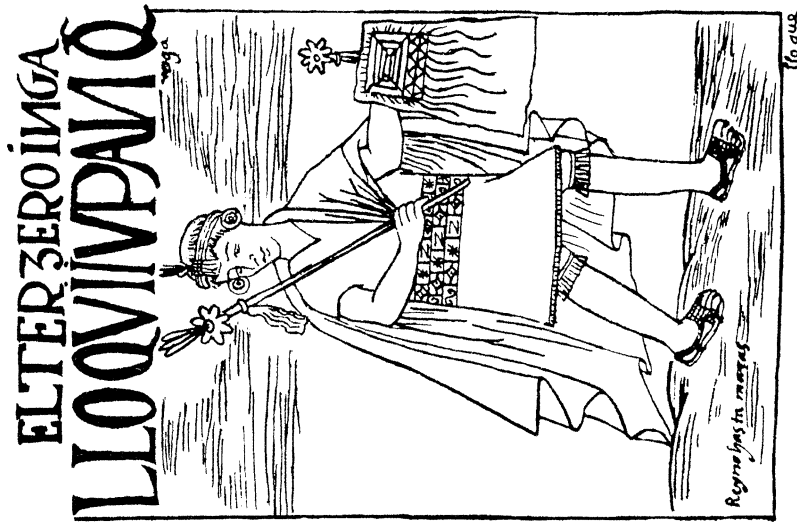
第二編 インカ帝国の国王と王妃



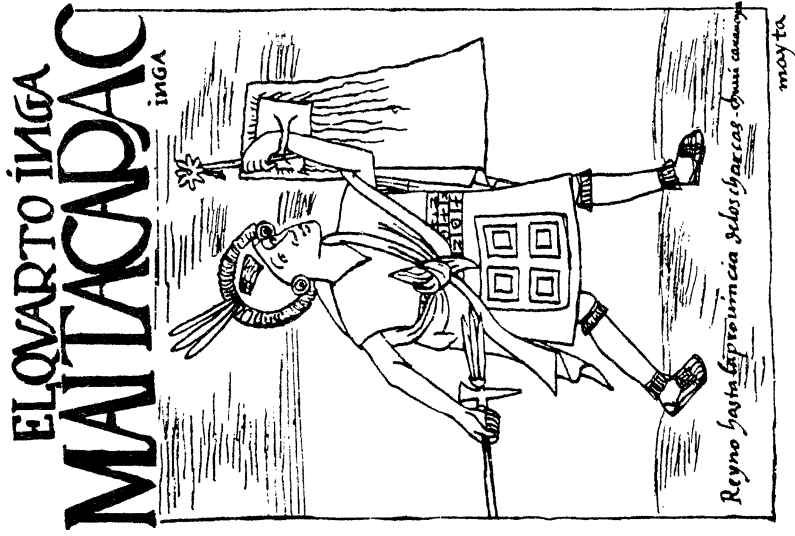
インカ王朝の始祖マンコ・カパック
始祖マンコ・カパックはクスコを統治した。初代インカ王は、緑色のターバン、金のパラソルと耳覆いを着けていた。170歳で死去した。とても穏やかな性格で多才だった。太陽を崇拜するために太陽神殿コリカンチャを建設した。始祖の父は太陽、母は月であると述べた。



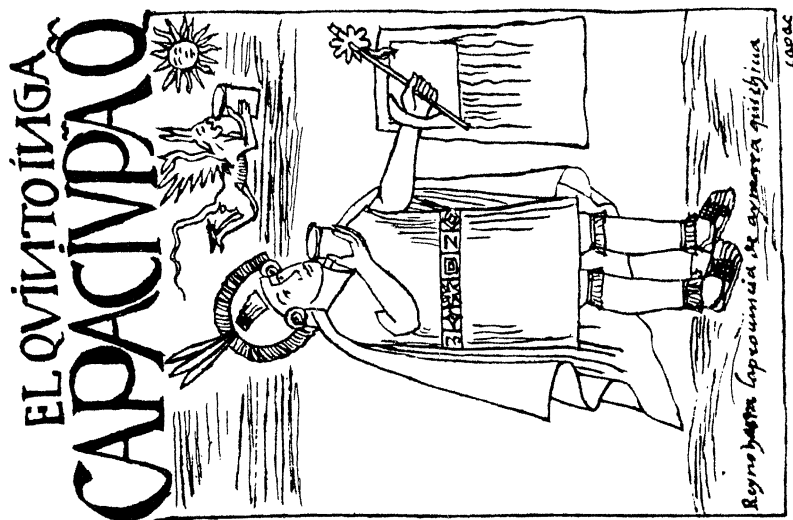
第2代インカ王シンチ・ロカ
アタン・コリヤ、アレキパまで征服した。非常に行動力があつた。勇敢な顔立ちで、肌は褐色で、色鮮やかなターバンを巻き、パラソルを手にした。右手には斧、左手には盾と石斧を持っていた。太陽神殿や偶像に多くの財宝を寄付した。



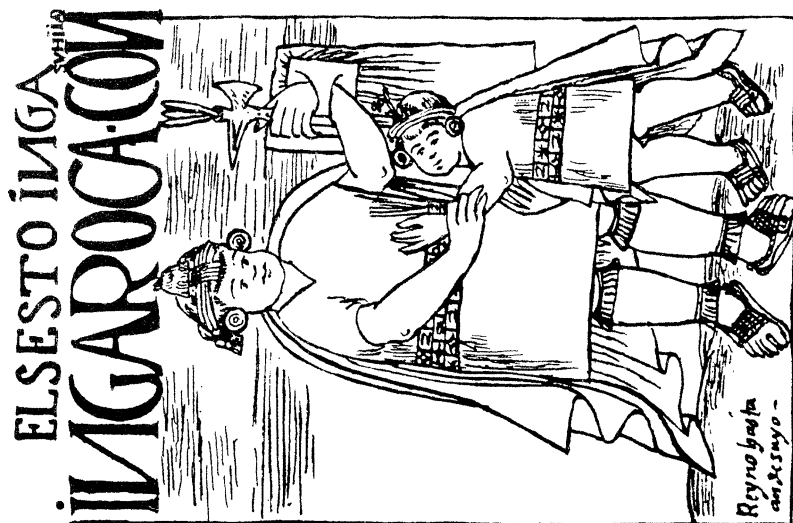
第3代インカ王リヨケ・ユパンキ
マラスまで統治した。歪んだ鼻、大きな口と唇、浅黒い肌で、醜かった。臣民は王の顔を見ないよう避けた。右手には斧、左手には盾を持ち、頭には王家の記章をつけていた。ひどい悪人だった。



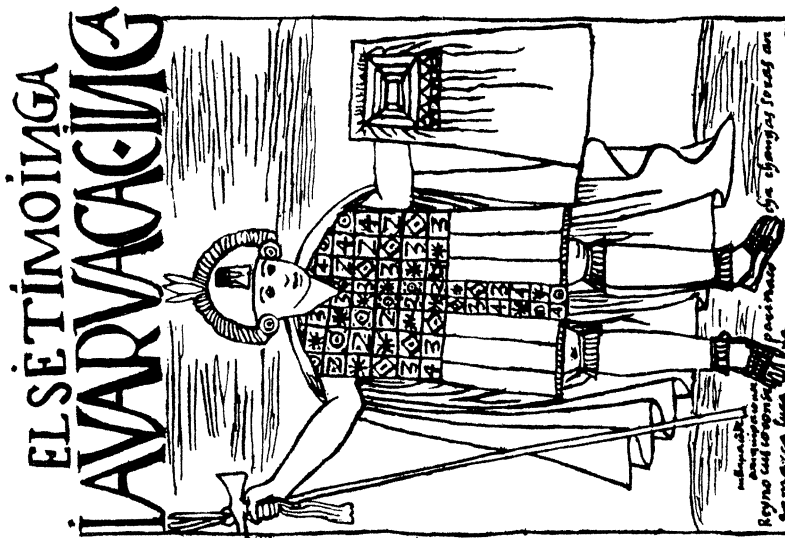
第4代インカ王マイタ・カパック
チャーカーカス地方、チュリ、カラバヤまで統治した。醜い顔、不格好な手足だった。痩せていて、寒さに弱かった。憂鬱な性格だったが、とても勇敢だった。父から征服地ポトシやチャーカーカスまで統治した。お気に入りの偶像グアナカウレに多くの富を残した。



第5代インカ王カパック・ユパンキ
アイマラ族やケチュア族の地域まで統治した。武器を持ち、王であることを象徴する装飾品を頭につけていた。女性好きだった。背丈は中くらいで、面長で、強欲、無知だった。父なる太陽に祝杯を挙げ、偶像に食物を供えることを始めた。

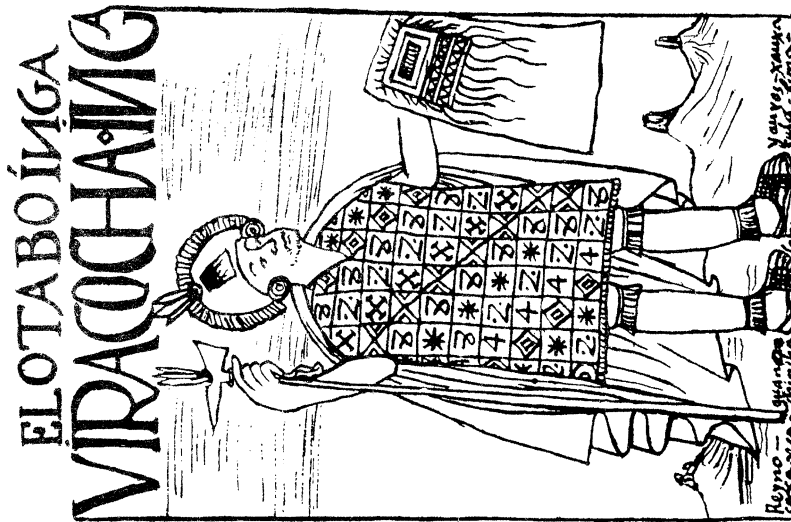


第6代インカ王インカ・ロカ
息子と一緒にアンティスuyuまで統治した。大柄で力が強く、多弁で、賭け事好きな好色家だった。息子を大変可愛がり、手をとって連れて歩いた。この時代から、インカではコカを噛むようになり、今日までインカ人の習慣として引き継がれている。



第7代インカ王ヤワル・ワカック

クスコ、コンデスーユ、バリナコチャ、チャンカ、ソラス、アングマルカ、ルカナスから成っていた。背丈は低く、力が強く、大きな目をしていた。貧しい人々にやさしく、音楽を愛し、金持ちの敵だった。非常に性格がよかった。病氣や疫病を予防するために、断食と罪の償いを始めた。人々を苦しめる不幸な出来事が終わるように、祈祷師に偶像に祈らせ、儀式を執り行った。

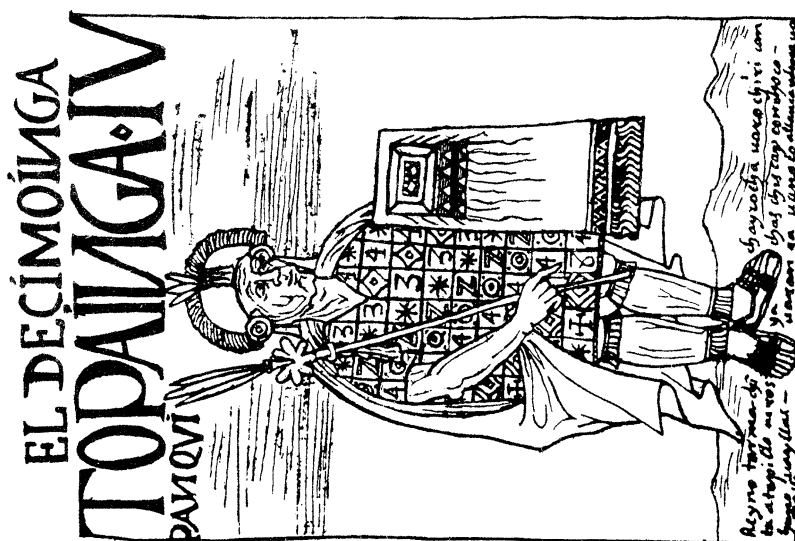


第8代インカ王ウィラコチャ

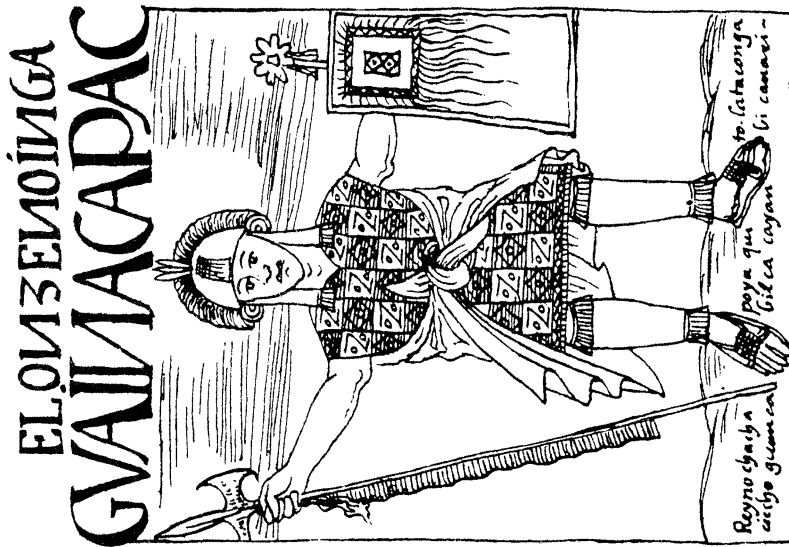
ワンカ、ヤウユース、ハウハ、カハ、イカ、チンチャ、サティ、スルコ、リマを統治した。偶像に敬意を表し、大広場で盛大な宴会を催した。多くの犯罪者、姦通者、強姦犯を裁きにかけて。最高の神と考えていたウィラコチャ神に多くを捧げた。他の偶像をすべて燃やそうとしたが、反撃されて殺されることを恐れて、彼の妻が止めた。



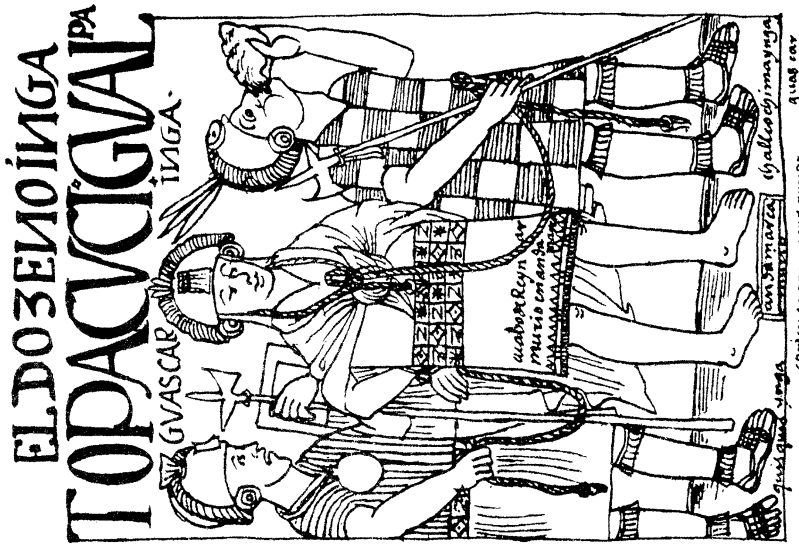
第9代インカ王パチャクティ・インカ・コパンキナリにまで領土を広げ、アンデス山脈一帯を治めた。大柄で、ライオンのような目をしていて、大飲食家だった。戦好きで、いつも勝利を取って帰って来た。戦いでは、右手に黄金の石投げ器を持った。神や太陽の処女の寺院や家を造った。



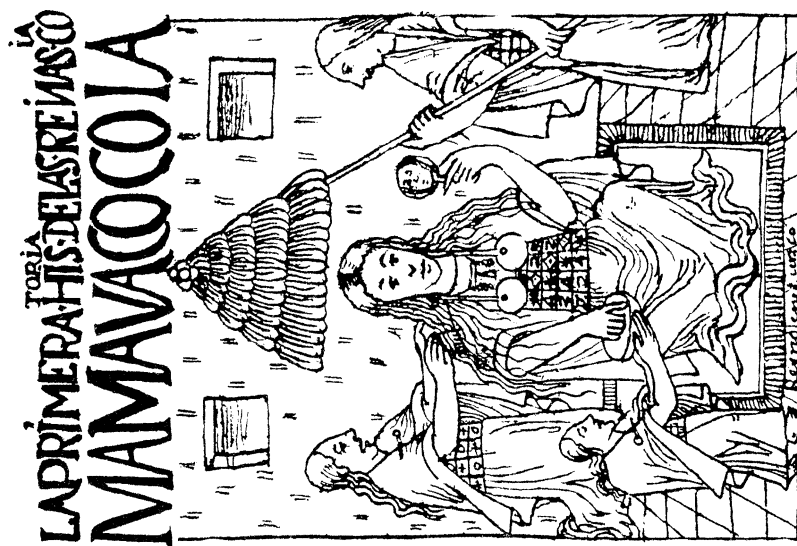
第10代インカ王トウパク・インカ・コパンキナリにまで領土を広げ、アンデス山脈一帯を治めた。大柄で、ライオンのような目をしていて、大飲食家だった。戦好きで、いつも勝利を取って帰って来た。戦いでは、右手に黄金の石投げ器を持った。神や太陽の処女の寺院や家を造った。



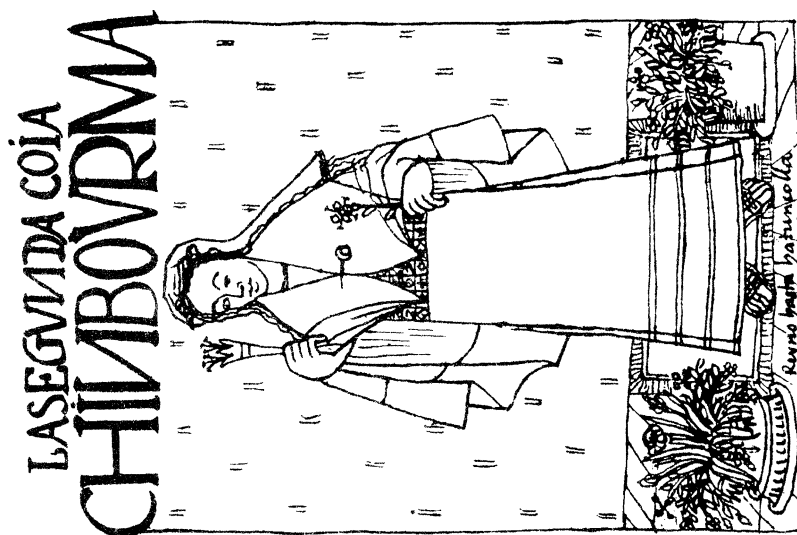
第11代インカ王ワイナ・カパック
チャチャポヤス、キト、ラタクンガ、ワンカペリカ、カランビ、カナリを統治した。肌は白くハンサムで、誰からも尊敬され慕われた。悪魔と話し、スペイン人がインカ帝国を征服しにやってくることを知ったと言われている。



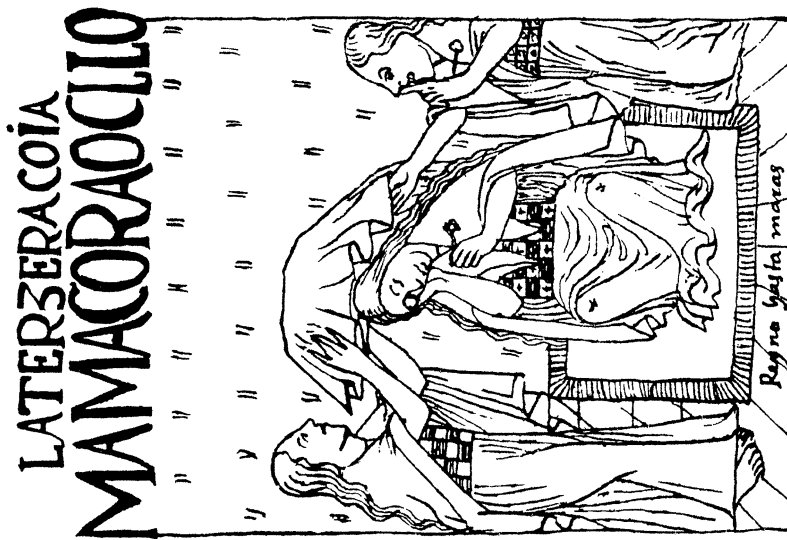
第12代インカ王ワスカル・インカ
インカ帝国の最後の王。アンダマルカで死去した。父なる太陽に選ばれ命名された。ペルーの帝国全体の正当な継承者だった。25歳のとき、アンダマルカで敵の手によって捕えられた。そして兄弟のインカ・アタワルパの命令に従い、部将キススとチャルコチャマによって処刑された。



初代インカ王マン・ワコクスコを支配した。とても美しく、浅黒い肌で、整った体型だった。悪魔や石、偶像と言葉を交わす妖術師だったらしい。



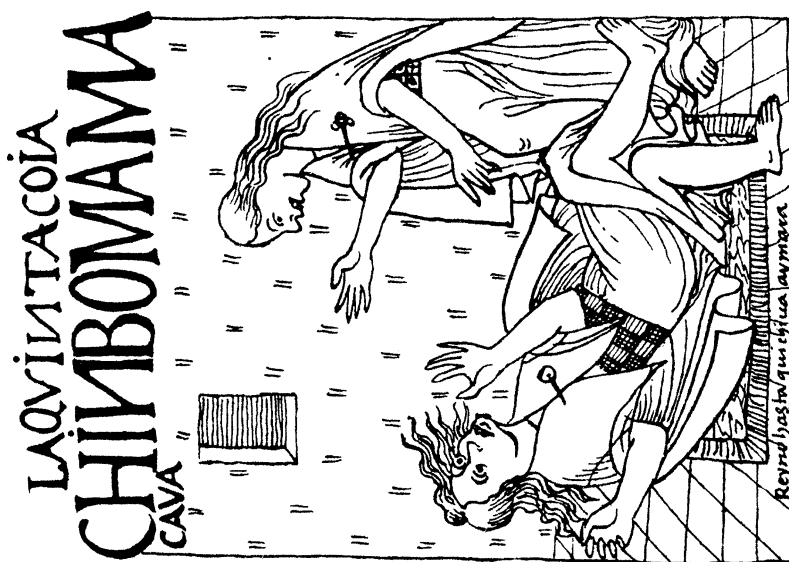
第2代インカ王妃ワトゥンコリヤまで征服した。母親同様とても美しく、花を生けたり、庭造りが好きだった。家臣にとっても寛大で、いつも陽気だった。



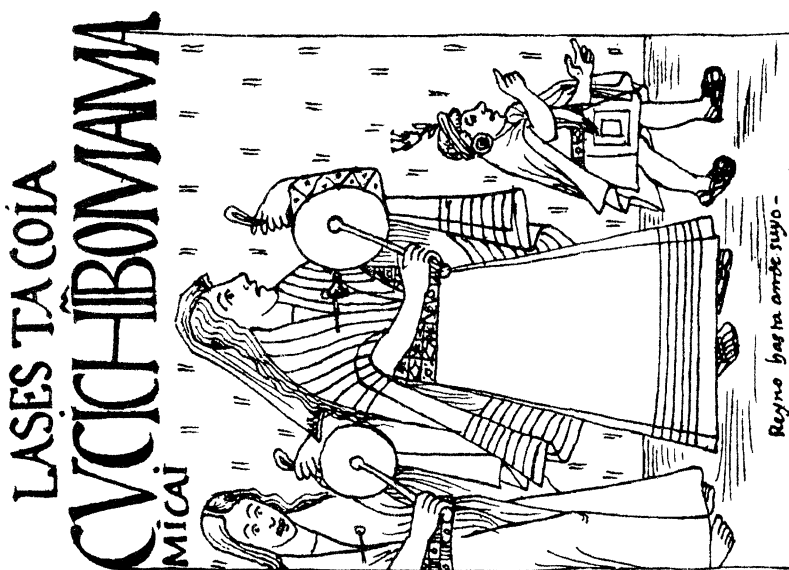
第3代インカ王妃ママ・コラ・オクリヨ
マラスまで統治した。とても美しかったが、祖母には及ばなかった。食は細かったが、チチャはよく飲んだ。儉約家だったため、家臣とは折り合いが良くなかった。いつも悲しげで、侍女とは距離を置きたがり、長生きを望まなかった。



第4代インカ王妃ママ・ヤチイ・アーマ
チャーカーカスまで領土を広げた。小柄で醜く、肌は浅黒かったが体調は良好だった。尊敬される女性で、他の有力な女性を訪ね、食事をともにしたり、音楽を楽しみながら、談話するのが好きだった。老人や貧しい人々を助けるために、夫からこっそり盗み出したらしい。

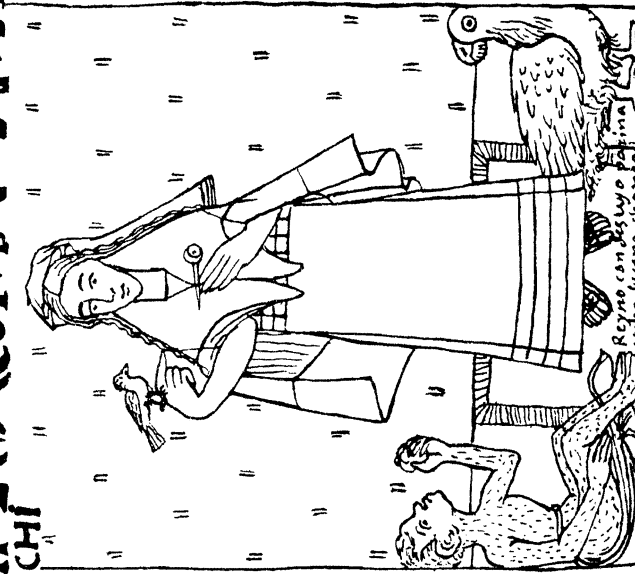


第5代インカ王妃チンボ・ママ・カワ
チナオ、アイマラまで統治した。穏やかで、謙虚だった。心臓の病気に苦しみ、
叫び声を上げたり、他人を激しく攻撃するようになり、醜い容姿になってしまい、
任務を遂行することができなかった。



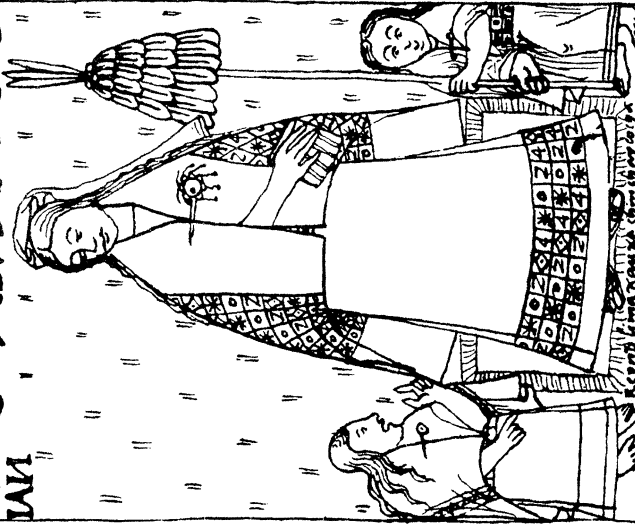
第6代インカ王妃クシ・ママ・ミチエイ
アンティスユーまで統治した。
非常に色白で美しく、整った体型だった。本拠地を好み、タンバリンを奏でなが
ら歌うのが好きだった。宴会や晩餐会を催し、いつも花束を持っていた。

LA SETIMA COIA IPAVACOMANVAMA CHI

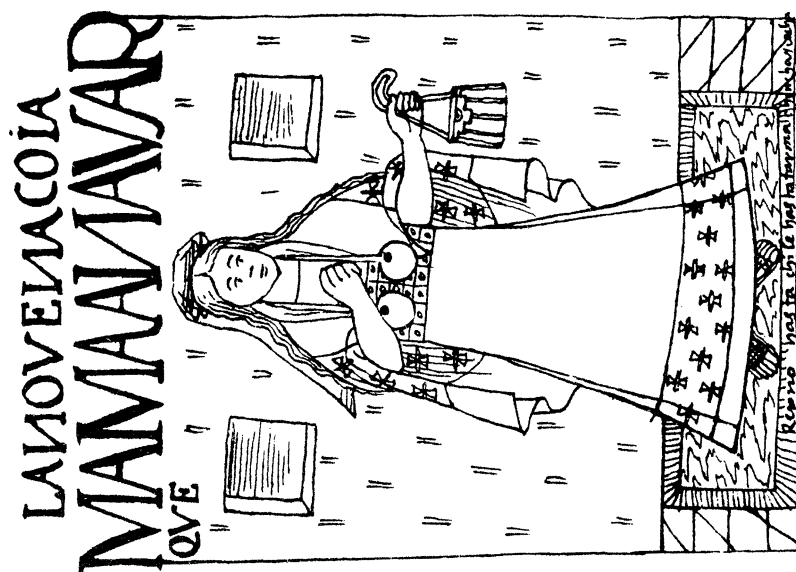


第7代インカ王妃イパウコ・ママ・マチ
クンティスーユ(西部地方), パリナコチャ地方, ルカナス, チャンゲイを統治し
た。インコ, オウム, コンゴウインコなどの歌う鳥に餌をやるのが好きだった。
貧しい人々に多くの施しをした。

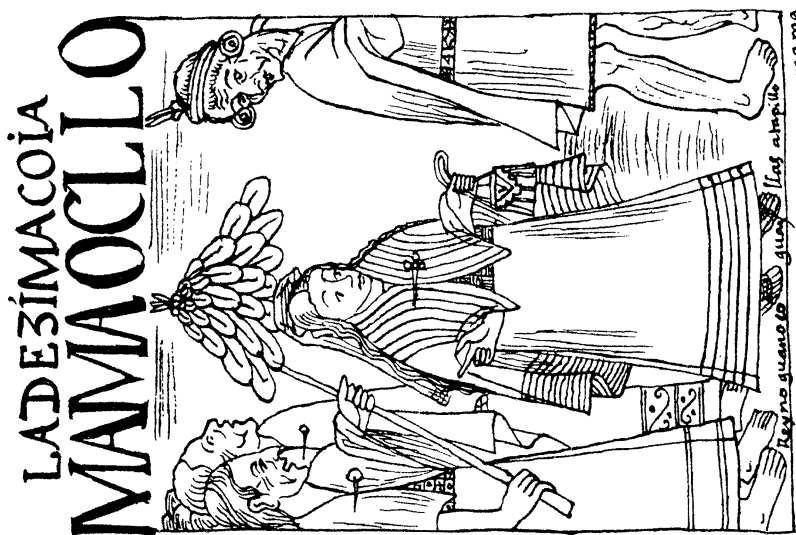
LAOTAVA COIA MAMAIMITOCA LAVI



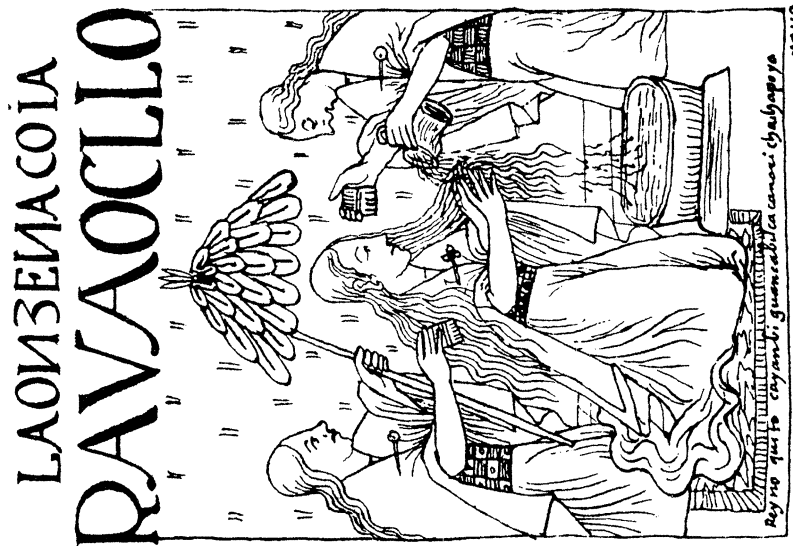
第8代インカ王妃ママ・ルトウ・カヤ
リマ, ハウハ, チンチャイコチャまで領地を拡大した。陰気な性格で, 宴会や歌,
踊りは好まなかった。涙もろかった。コカを好み, 寝ているときにもココアの葉を
口に含んでいるほどだった。



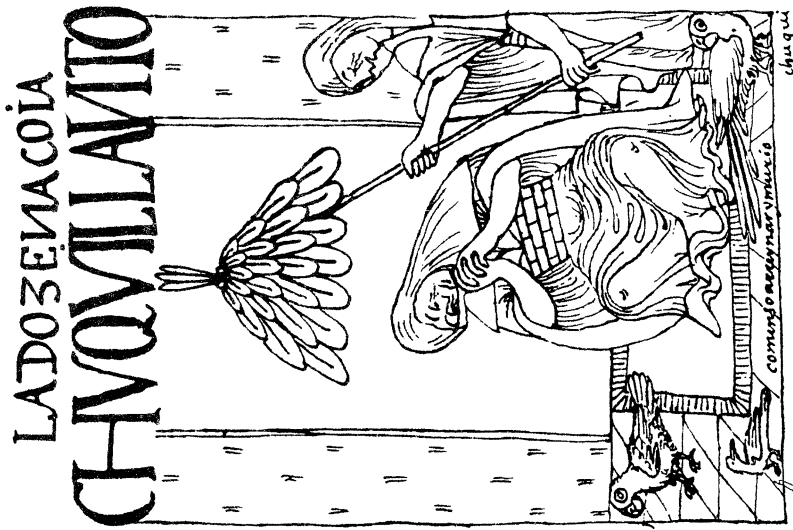
第9代インカ王妃マ・アナワルキ
ナリ、タルマ、チンチャイコチャまで統治した。丸顔で美しく、目と口は小さかった。王にはあまり従順ではなかったらしい。神から飢餓と疫病の罰を与えられた。



第10代インカ王妃マ・オクリヨ
ワヌコ、ワイラス、アタピロまで支配した。美しい女性で、体型はぼちやりして、小顔だった。明るい性格だったが、夫に嫉妬していた。相続財産にとっても関心を持っていた。



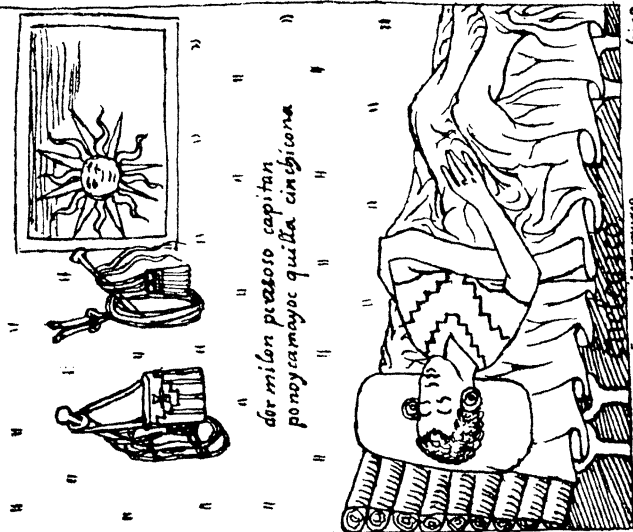
第11代インカ王妃ラワ・オクリヨ
キト、カランビ、ワンカベリカ、カナリ、チャチャポヤスを支配した。とても美しく、整った体型で、美しい髪をしていた。貧しい人々の救済に尽力を尽くした。



第12代インカ王妃チュキリヤントウ
王妃に就任してすぐに亡くなった。とても美しく、歌うのが好きで、小鳥に餌をやるのが好きだったと言われている。

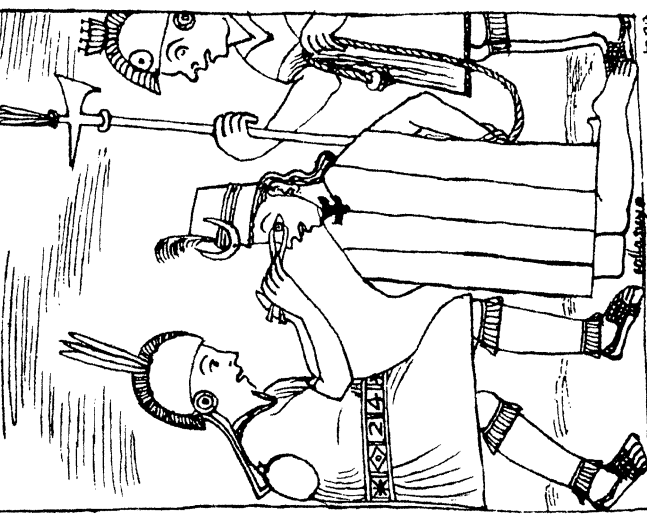
第三編 インカ帝国の部将

CAPITULO PRIMERO
INGAVPAIQUI

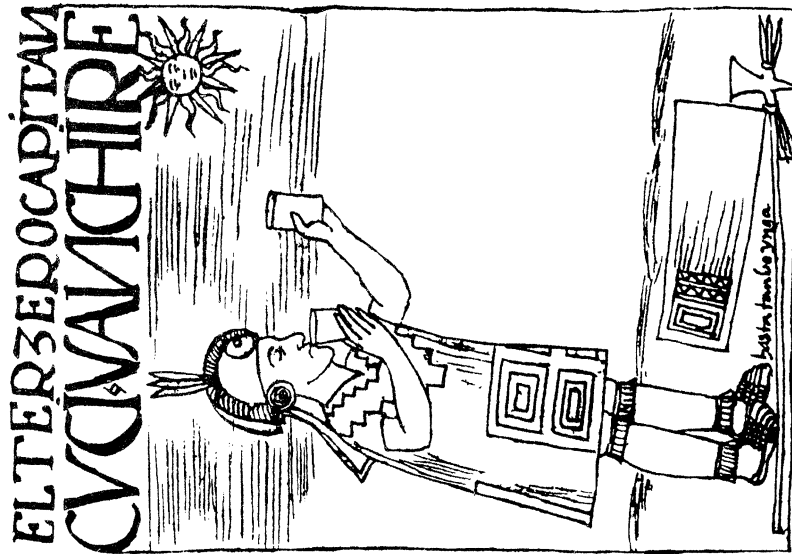


初代インカ部将ユパンキ
とても怠け者で、なにも征服しないうちに死去した。彼は、寝ることと飲食が大
好きで、宴会を開いたり、町をうろついたりした。

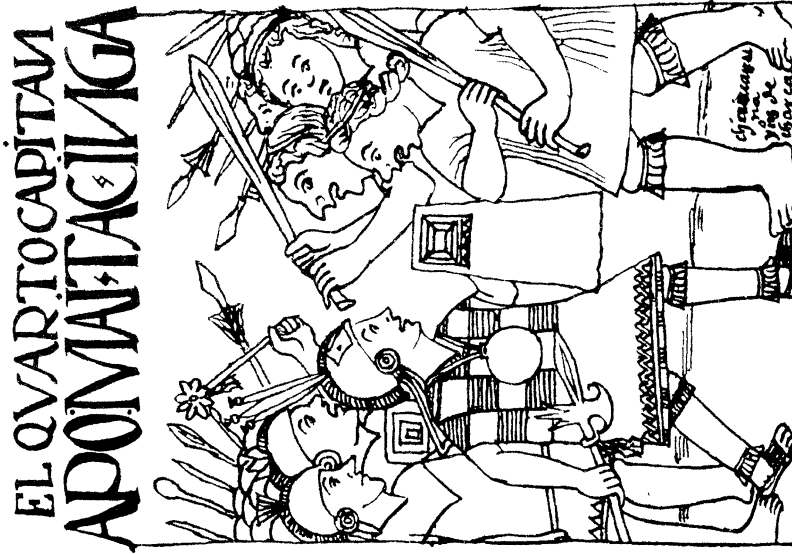
EL SEGUNDO CAPITULO
TOPA AMARU INGA



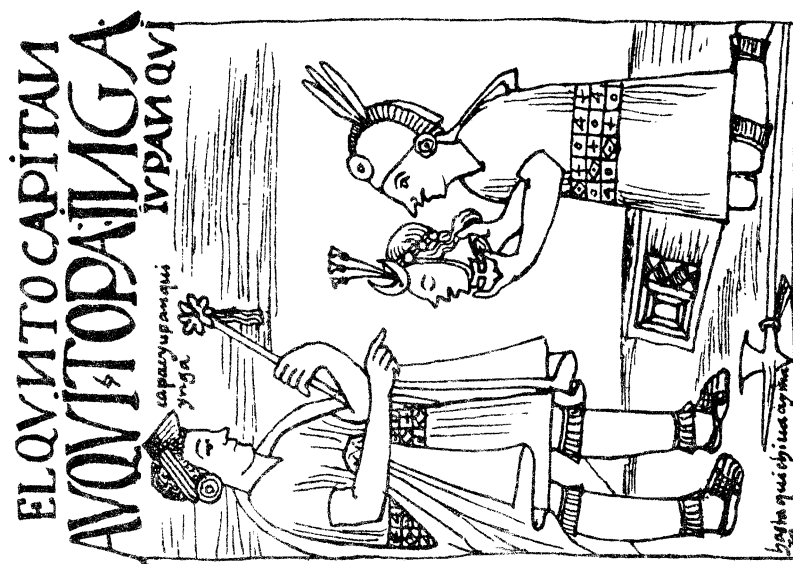
第2代インカ部将トパ・アマロ・インカ
とても勇敢で、コリャスーユ(南部地方)を征服した時に、敵の目を引き抜いた。



第3代インカ部将クシ・ホワンチレ
戦いではとても勇敢で、出陣の前には太陽に杯を捧げながら酒を飲んだ。タン
ボ・インカまで征服した。



第4代インカ部将アボ・マイタック・インカ
チャーカーカス地方まで征服し、銀山と24金の鉱山を取得した。



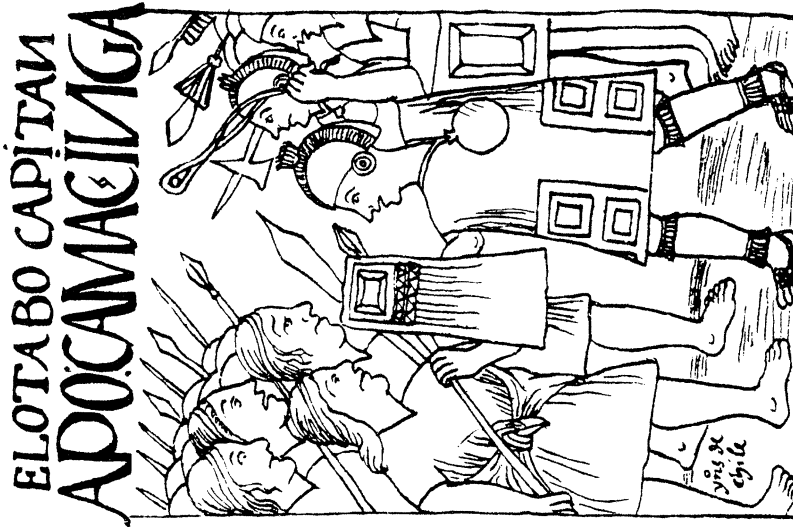
第5代インカ部将トバ・インカ・コパンキ
敵陣のイインディオヤ部将を多数殺害し、アイマラまで征服した。



第6代インカ部将オトロongo・アチャチ・アポ・カマック
ジャングル地帯を征服した。ジャガー(オトロongo)に変身して戦い、山岳地帯
では知られていなかったコカを持ちこんだと言われている。



第7代インカ部将インカ・マイタ
勇敢で偉大な軍事指導者だった。アングマルカ、ルカナス、パリナコチャ、ソラ
ス、チャンカ、ボマ、ユンガスを征服した。



第8代インカ部将アボ・カマック・インカ
ライオンのように勇猛で、鋭い目つきをしていて、平手打ちで敵を倒すことがで
きた。チリを征服した。



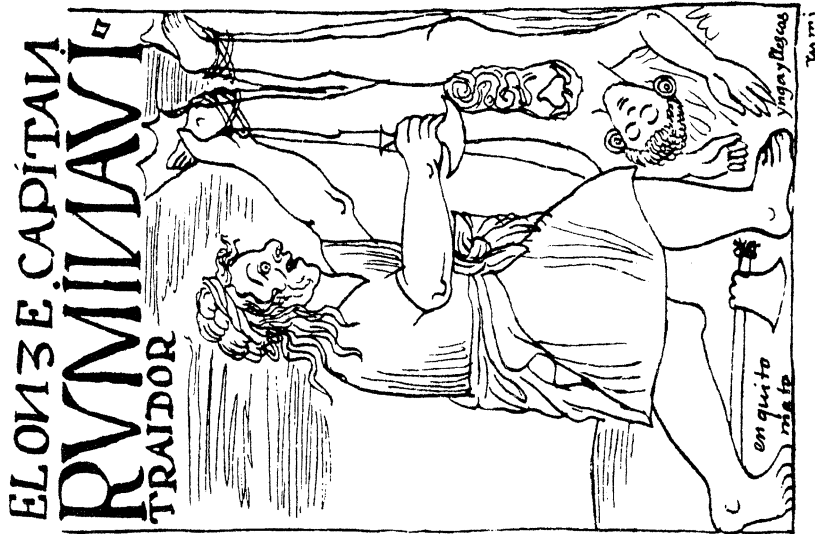
第9代インカ部将

クスコからインカまで石を運ぶ責任者だった。ある一つの石を運ぶのにあまりにも疲弊したと人々は言ったが、彼はなんとかして泣いて血を流す石を移動しようとした。

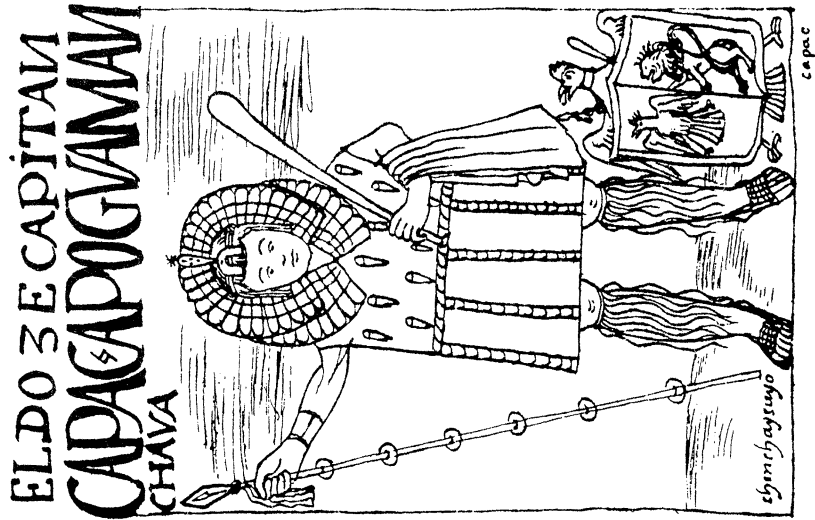


第10代インカ部将チャルコ・チマ・インカ

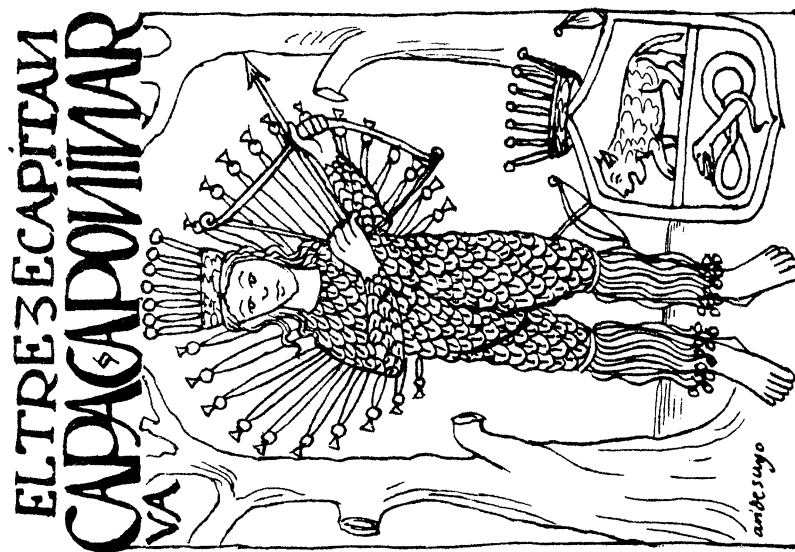
キト、カナリ、チャチャポヤス地方で戦った。



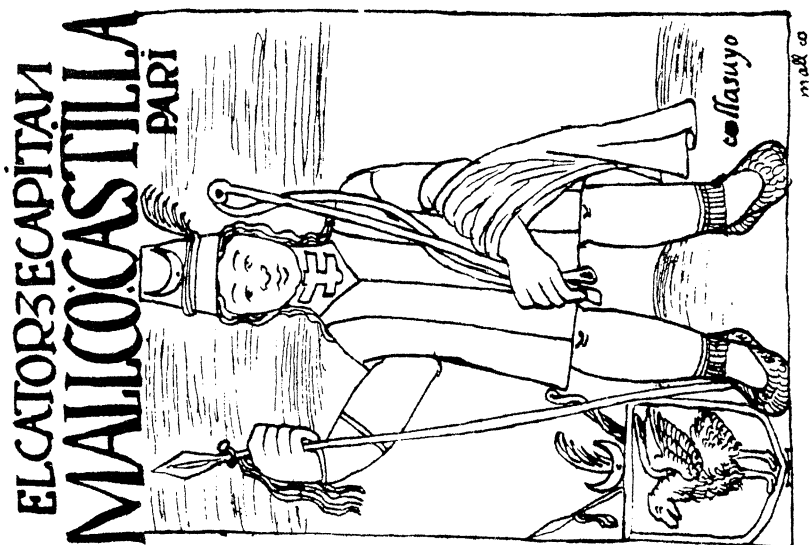
第11代インカ部将ルミナフイ
とても勇敢だったが、裏切ってインカ・イレスカスを殺害し、彼の皮で太鼓を、
頭蓋骨で杯を、骨で笛をつくったと言われている。クスコで死去した。



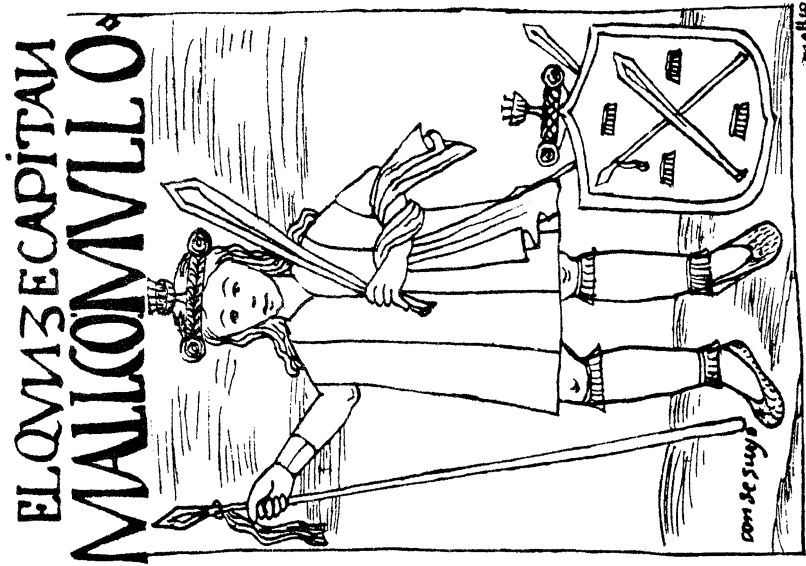
第12代インカ部将カッパク・アポ・ワマン
この絵を描いた作者の祖父であり、チンチャイスユーを征服した。



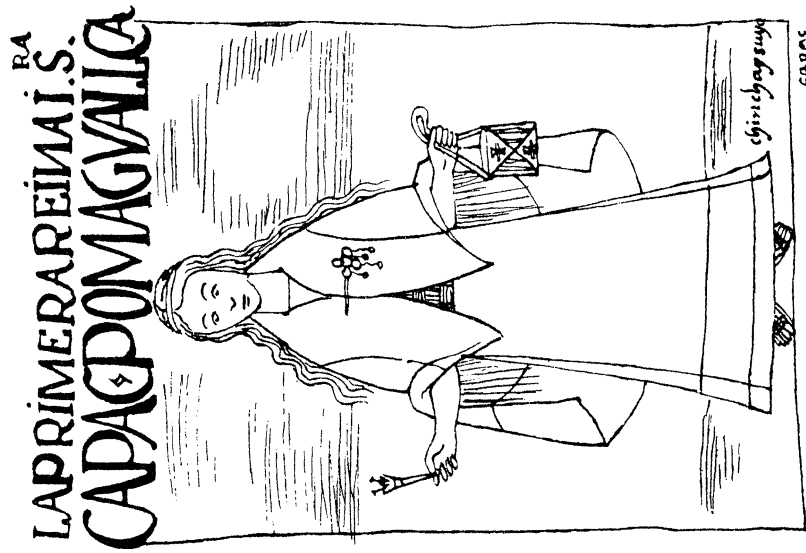
第13代インカ部将カパック・アボ・ニナウラアンティスユーまで征服したが、多くの異教徒の村が支配されないうままに残っていた。



第14代部将マルコ・カステイリーヤ・パリキトまで征服し、「ミティマエ」(外国人)と呼ばれる多くの子孫を残した。



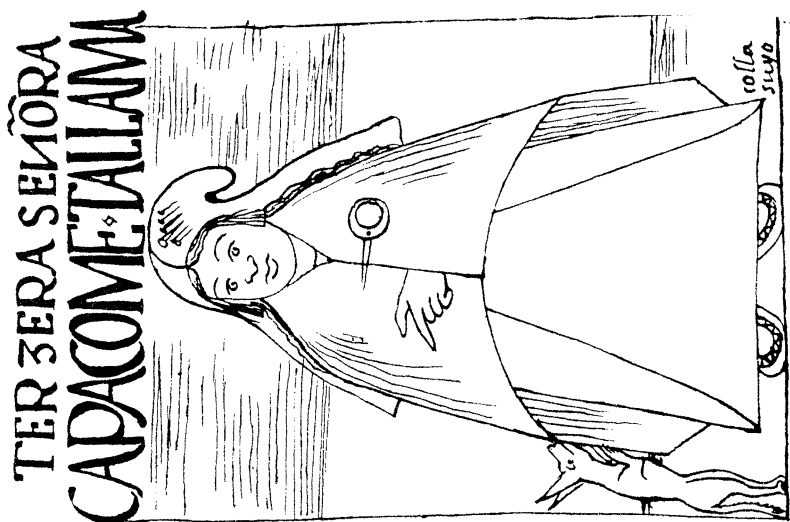
第15代部将マルコ・ムリヨ
他の勇敢で有力な部将を従え、もとの村に戻った征服者もいたが、死に追いや
られた者もいた。カハマルカ、キト、トゥミ、チャチャボヤス、ラタワング、ワ
カビルカを征服した。



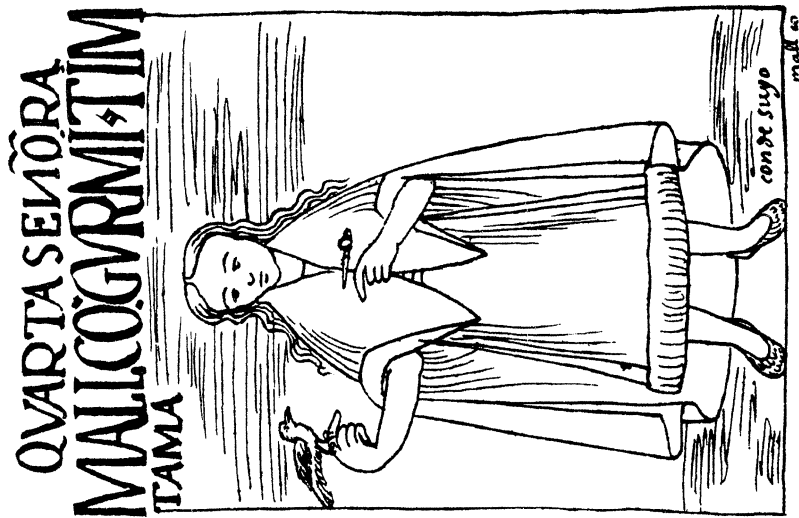
第1婦人、チンチャイスーユ（北部地方）のカツパク・ボマ・ウルカ
とても美しい女性だった。この挿絵の著者の祖母である。



第2婦人、アンティスーユ (東部地方) のカパック・マルキナ。整った体型で、とても美しく、スペイン人よりも白かったが、裸足で歩きまわった。この地方では、人々は人肉を食べ、金銀が豊富にあると言われている。



第3婦人、コリャスーユ (南部地方) のカパック・ウミ・タルナ。美しい女性だったが、太って醜くなっていった。彼女の親戚はみんな太っていて、怠け者で、小心者だったが、金持ちだった。



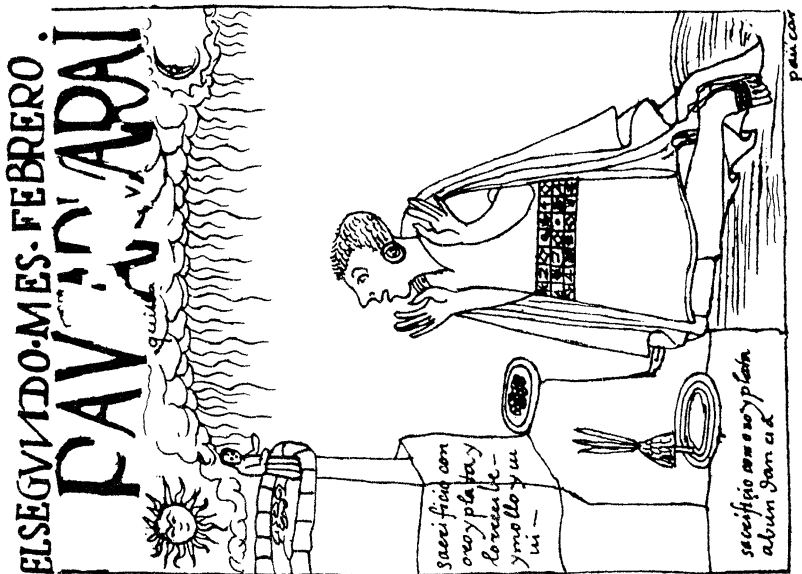
第4婦人、クンティスーユ（西部地方）のマルコ・ワルミ・ティムタマ
とても美しい女性だった。彼女の土地はとても貧しく、アレキパ地方には金も銀
もなかったが、血筋の良い重要な人物だった。

第四編 インカ帝国の年間行事と儀式



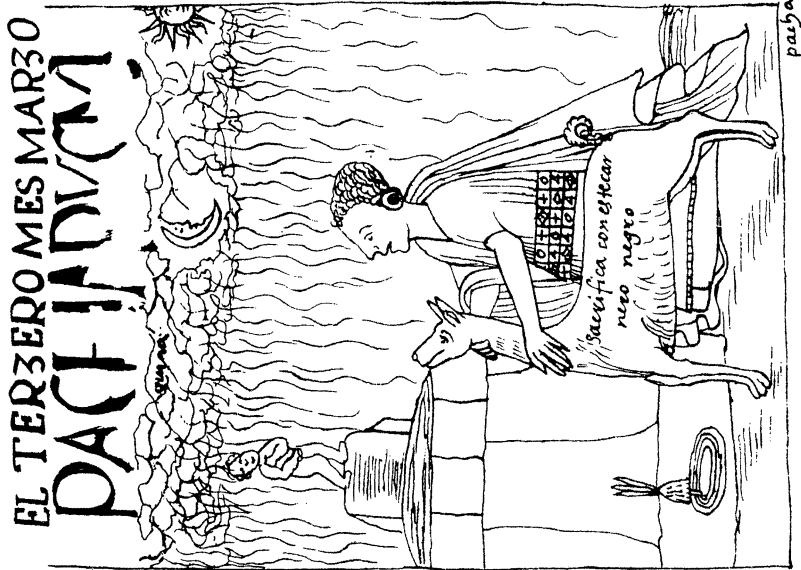
1月

断食，苦行に身を投じた。太陽神殿と月の神殿へと行列をつくり，山から山へと
渡り歩いて偶像を崇拜し，祈禱師らによって儀式が遂行されると涙を流した。特
に聖地ワナカウリとパカリタンボへ多くの人が訪れた。



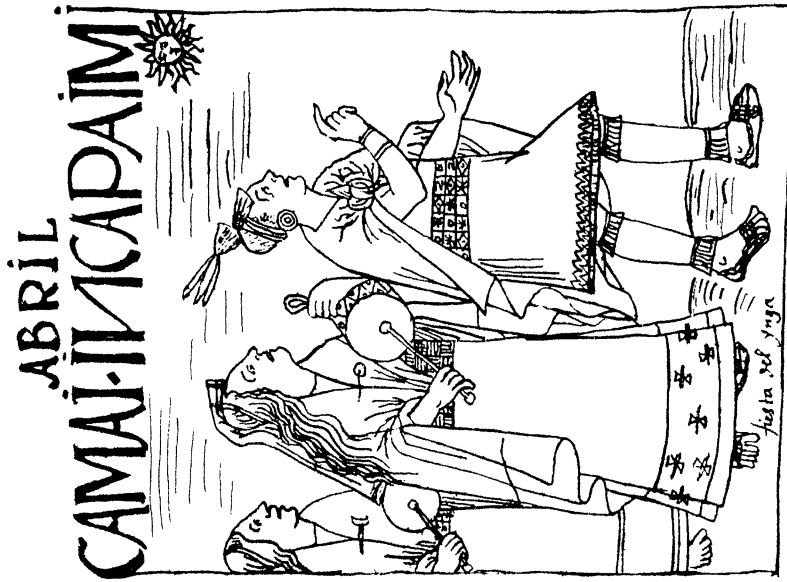
2月

国中のインカは，大量の金銀を最も重要な神々，太陽，月，星に捧げる。この月
には多くの雨の雨が降り，雑草が多く，食料はほとんどない。



3月

インカが司祭と共に行う儀式で、黒いラマが生贄として捧げられた。人々は断食を行い、塩や果物を食べずに自制した。性行為も慎んだ。この月には、食糧が豊富に手に入るようになり、多くの花が出現する。



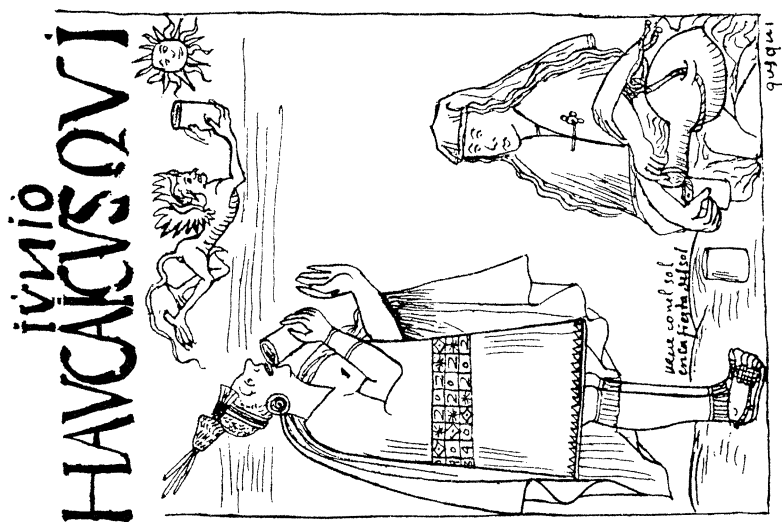
4月

様々な色のラマが多くの儀式で生贄として捧げられる。インカは盛大な宴会を催し、有力な貴族を招く。インカの支配下にある貧しい人々も儀式に参加し、広場で食事をして踊る。祝宴では、インカの特別なチチャ「アムル・アカ」を飲む。



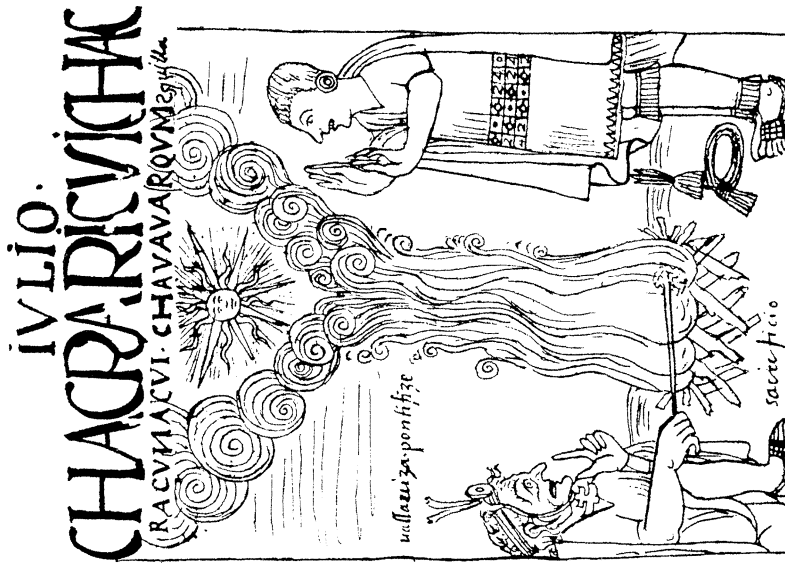
5月

食糧が豊富な時期で、多くの食料備蓄のおかげで、貧しい人々も一年中食べることができ。多くの祝宴が催され、人々は飲み、食い、歌い、トウモロコシとジャガイモの栽培される畑を訪れる。成長した家畜は、色とりどりに塗られ、捧げられる。



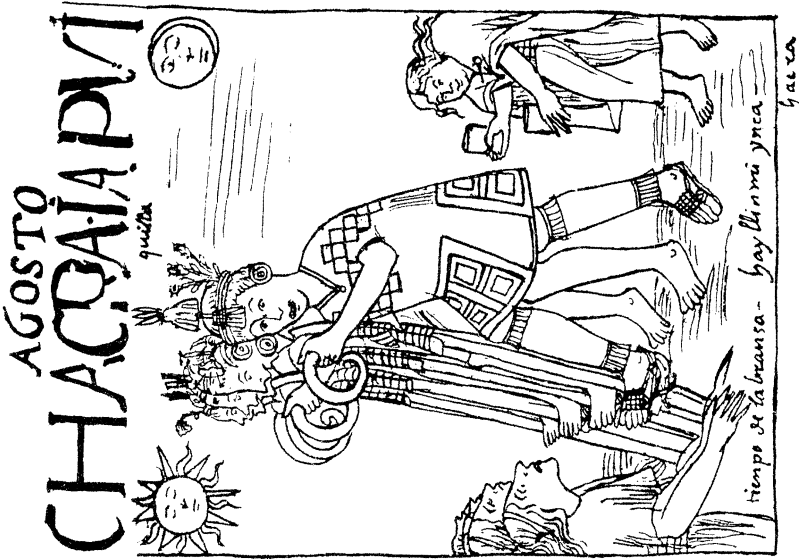
6月

太陽神を称えて、インティライミが盛大に行われる。多くの金、銀を差し出し、国中で生贄が捧げられる。カパコチャの儀式では500人の子どもが生き埋めにされた。村から村へ作物や家畜のでき具合を調べる巡察使がいた。このため、あらゆるものを正確に分配することができ、飢える者は一人もいなかった。



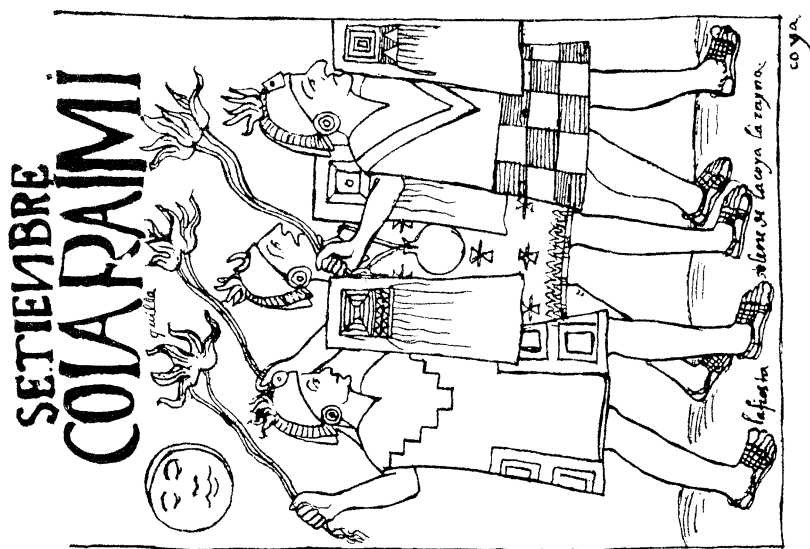
7月

畑を視察し、土地を分配した。100頭の彩られたラマと、1000匹の白い白いテンジクネズミが生贄として捧げられ、太陽と雨が豊作をもたらすように、広場で嫉かれた。気候の変化で多くの人が病気になる。きちんと世話をしないと、家畜も病気になる。



8月

トウモロコシを植えるために、畑を耕し始める。国中の豊作を祈って多くの祝宴が開催される。人々はナチャを飲み、肥沃な土地を願って「ハイリ」を歌う。インカが畑に種をまく。



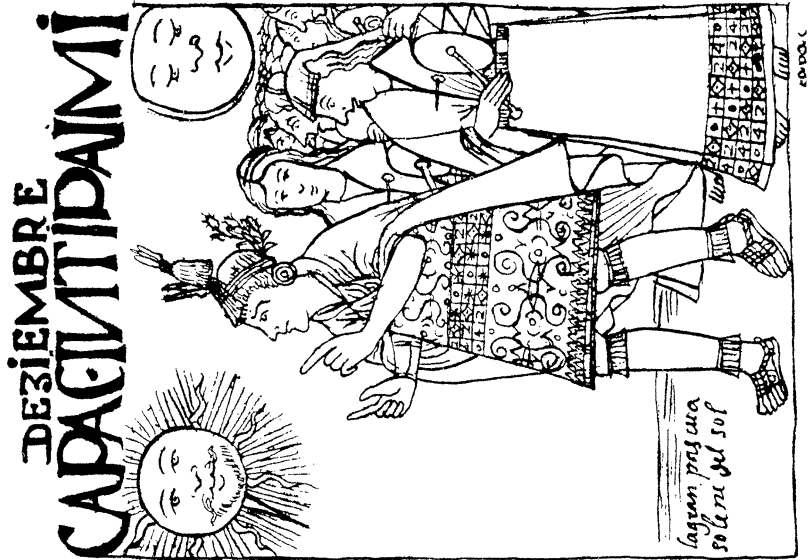
9月

太陽神の妻である月を称える祭りが盛大に行われる。女性たちはインカ女王の厳かな祭りを祝う。女性有力者たちは男性を招待する。彼らは石投げ器で武装し、家々から疫病や病気を追い払おうとする。



10月

天国から神々が水を恵んで下さるように、黒いラマを主要な寺院で生贄として捧げた。儀式の間、老若男女は行列をつくり、神からの恵みの雨を願って叫び声を轟かせた。人類の創造主、ルナ・カマックにも雨の恵みを願った。



12月

太陽の誕生を祝う祭りが厳粛に行われる。太陽は、惑星や星のなかで最も重要とされているからである。多くの生贄が捧げられ、金、銀、宝石が供された。クスコの大広場だけでなく、国中で太陽を称え、飲み、踊った。500人の若い少年少女が生贄として生き埋めにされ、金、銀、宝石や貝殻、家畜も一緒に埋められた。



11月

死者を祭る。美しく着飾り、頭に羽飾りを付けたミイラを、墓から運び出す。ミイラの前で、歌って踊り、食事を供し、通りや広場を通り抜けながら、家々を回る。この月に、インカは耳にピアスの穴をあける。

第五編 インカ帝国の宗教と葬式



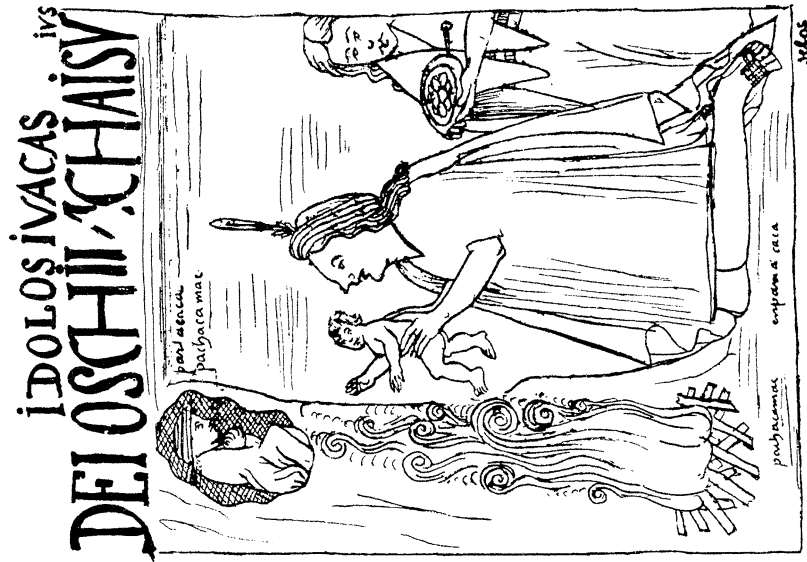
偶像崇拜

トパ・インカ・ユパンキが偶像や石、悪霊に語りかけ、過去や未来の出来事、そしてスペイン人が渡来して統治することを予言した。

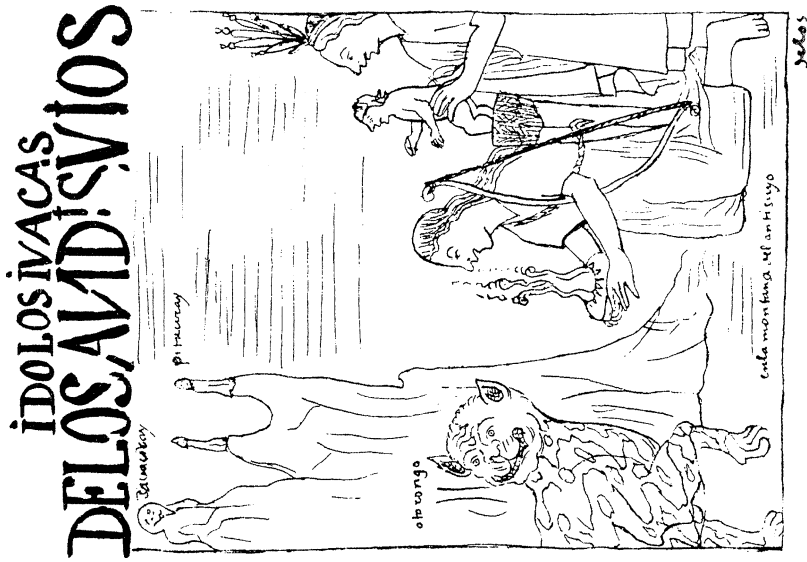


クスコでの偶像崇拜

インカは月、女神、を崇拜する祭壇を持ち、皇女コヤは魔女と一緒に生贄をささげ、願い事が叶えられるように祈る。他にも神殿があり、ここではインカの息子、娘、王子が祈る。



チンチャイヌーユ (北部地方) の偶像崇拜
コカ、チチャ、果物だけでなく、五歳の子供も生贄として偶像パリアアカカに捧げ
る。犬も生贄として捧げられ、食べられた。今でも犬を食べる風習があり、罰せ
られるべきである。



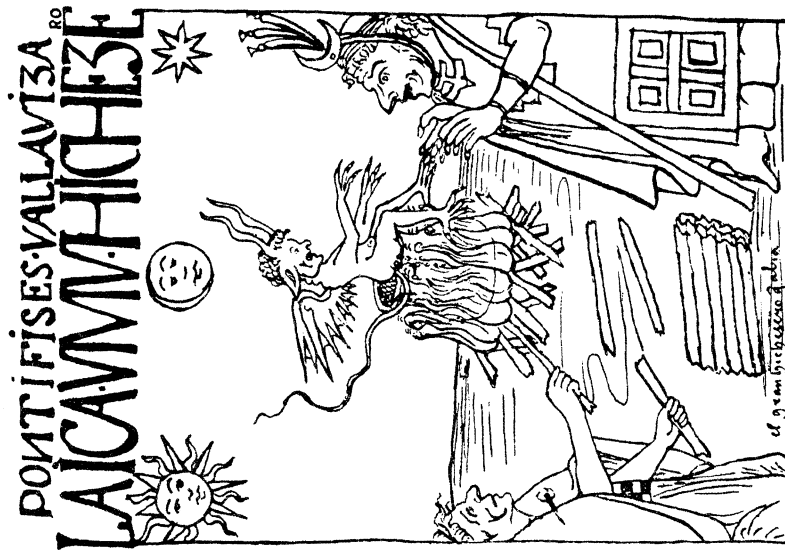
アンティヌーユ (東部地方) のジャングルにある偶像と寺院
彼らはジャングルの虎 (ジャガー) を崇拜し、動物の脂肪、燃えてる蛇、鼠、コ
カ、鳥の羽などが生贄として用いられた。ココの木も崇拜していた。偶像は持た
なかったが、虎と蛇に狂信的な信仰を捧げた。



コリャスーユ (南部地方) の偶像崇拜と寺院
彼らは黒いラマと白いラマ、チチャ、湖でとれる魚を生贄として捧げた。ティティ
カカ湖で金、銀などが捧げられ、燃やされ埋められた。

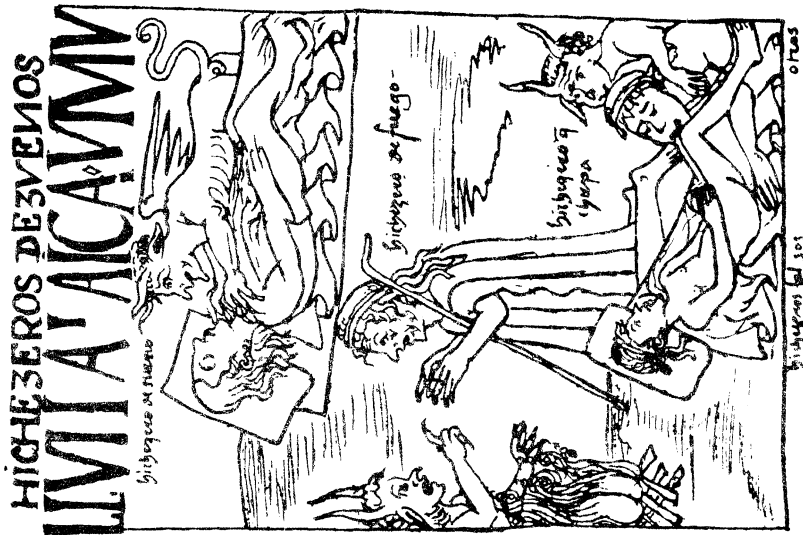


クンティスーユ (西部地方) の偶像崇拜と寺院
金、銀、コカ、生肉と一緒に生贄を捧げた。どの村にもインカによって建てられ
た寺院があり、生贄を捧げられるようになっていた。



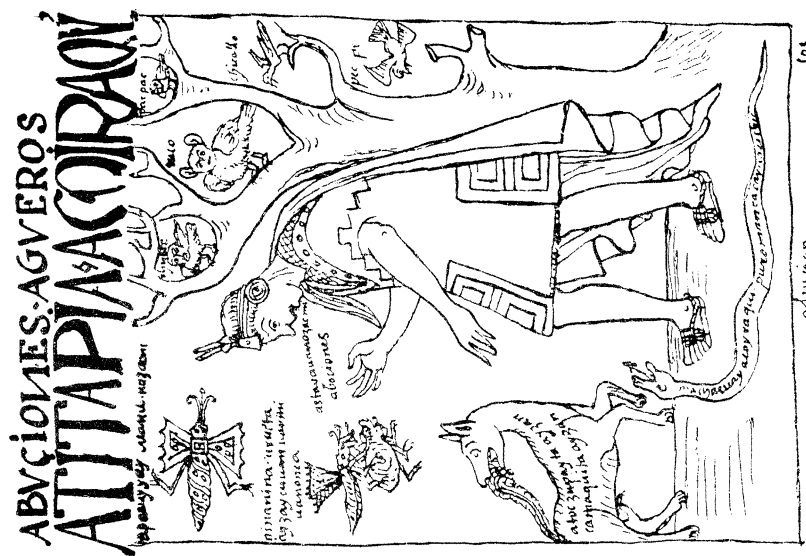
魔術師レイ・ウモ

新しい鍋を取り出して人間の脂肪、トウモロコシ、羽、コカ、金、銀を調理したと人々はいう。それから悪魔に話しかけ、男性と女性を合体させ、殺すために毒を提供し、その犠牲で将来を預言した。



悪魔の夢

悪魔に話しかけられると、悪魔の言いなりになってしまいうらしい。別の悪魔は肉体から病気を吸い取ることができるといふ。



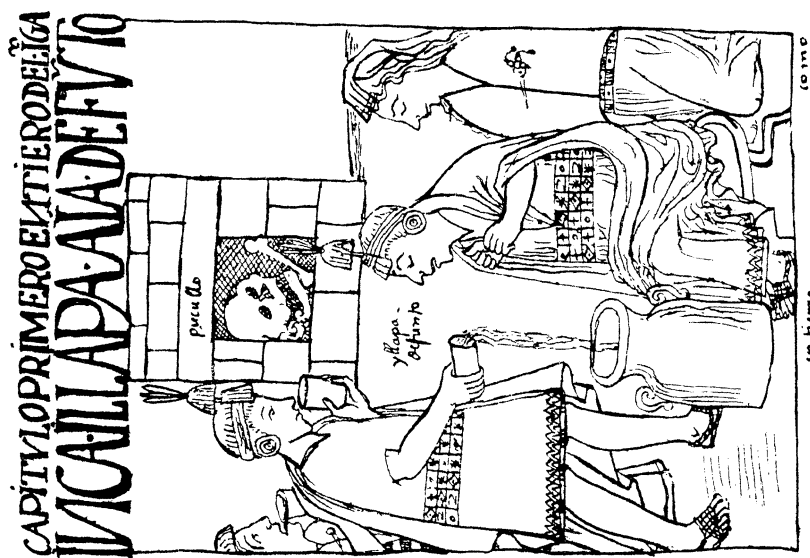
迷信

夢を信じると、誰それが病気になるとか、死ぬだろうとか、未亡人になると預言することがある。フクロウ、コウモリ、蝶、蛇などをを使って預言する。



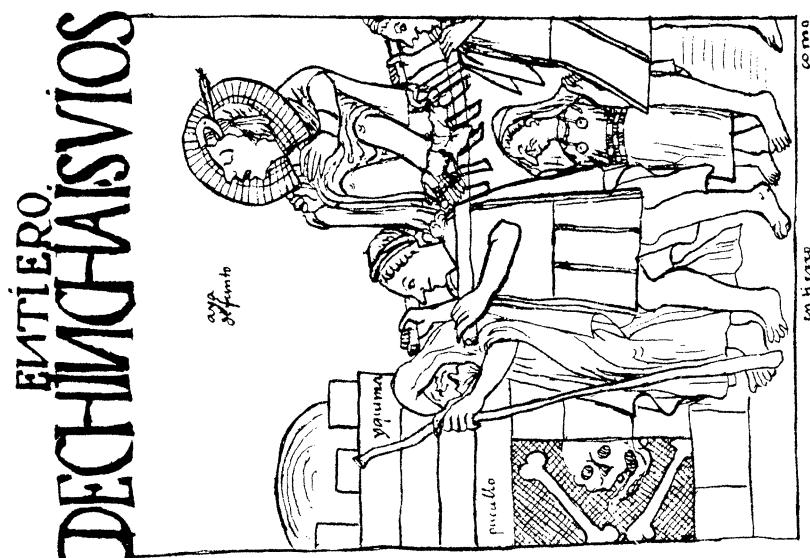
行列

インカは行列を作り、1ヶ月間絶食と禁酒をし、甘いものも塩辛いものも食わず、香草で焼いたトウモロコシを食べた。その間、笑わず、女性と一緒に寝ず、悲しみにくれた。病氣や嵐や雷をお払いするためといったさまざまな行列があった。



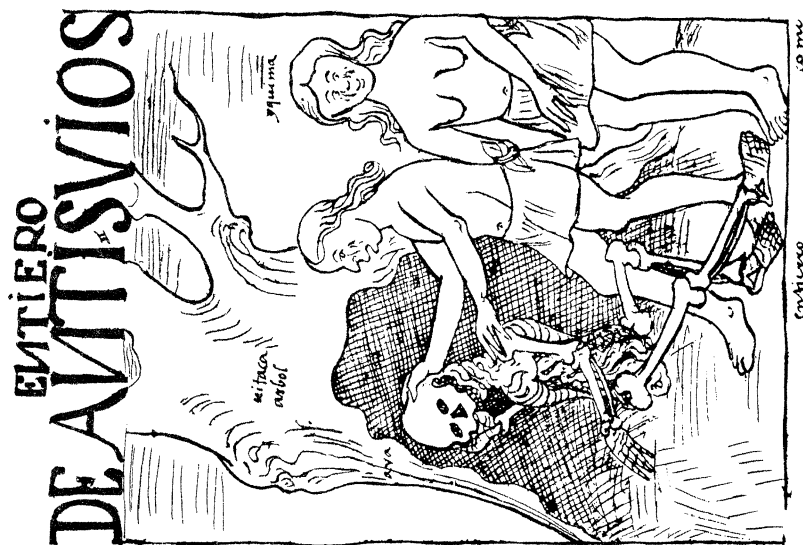
インカの葬式

インカは防腐処置を施され、生きていたような顔つきにされ、一番上等な衣装を着せられた。多くの金や銀の装飾品とともに埋められた。この王国でのこうした儀式では多くの人が涙し、歌い、音楽を奏で、踊った。1カ月後に厳粛な行列で連れて行かれ、地下墓所に埋められた。

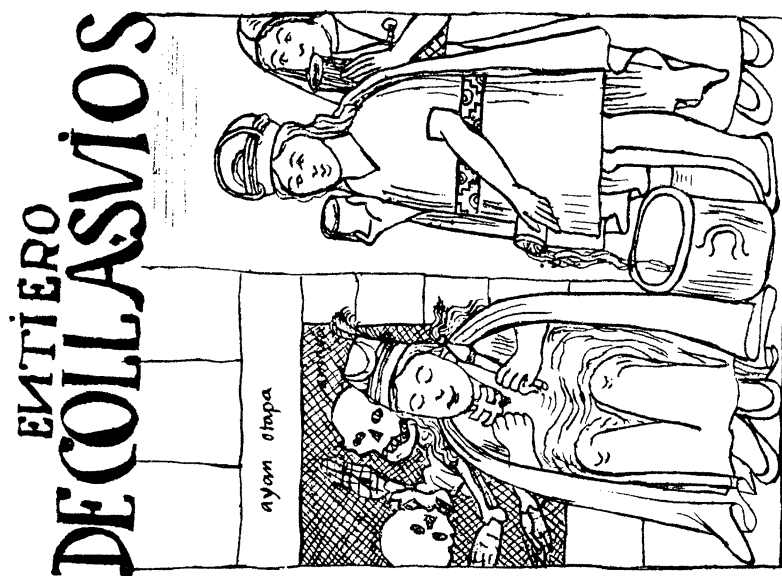


チンチャイスーユ (北部地方) の葬式

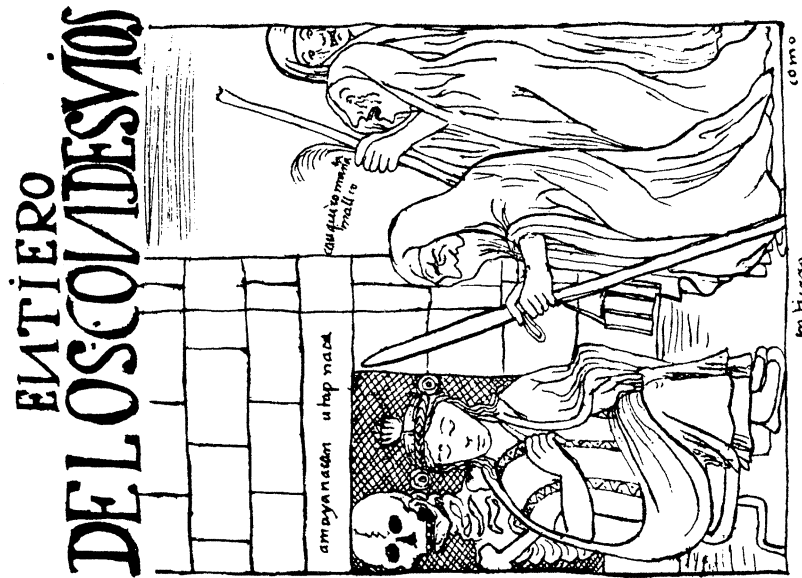
チンチャイスーユのインカは死後5日たってから埋葬された。故人は洗われ、服と羽を纏い、金銀の装飾品も身に付けた。それから行列が遺体を運んだ。未亡人の髪は切られた。よき未亡人は2年間この儀式を繰り返す。



アンティスーユ (東部地方) の葬式
 まる1日泣き悲しみ、大宴会を催すが、山間部のインディオのような儀式は行わ
 ないらしい。彼らは遺体を木の内側に安置し、覆い隠す。それっきりそのことは
 忘れ、再び墓を訪れることはない。



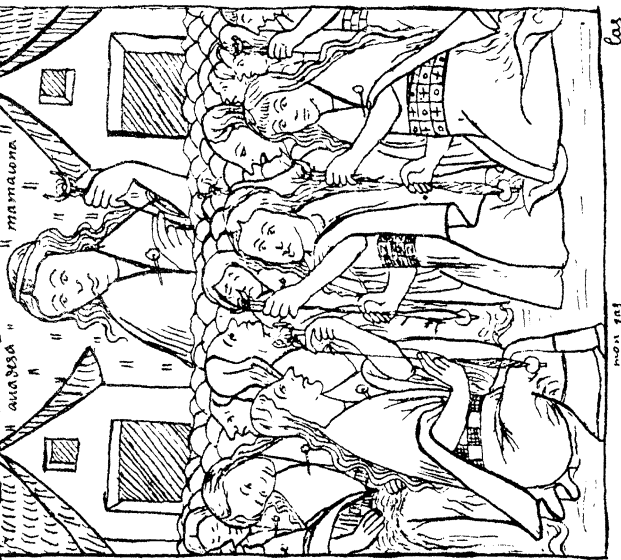
コリヤスーユ (南部地方) の葬式
 まず遺体を着飾り、初日は泣き悲しむ。それから5日後に座位で墓に安置し、金
 銀の装飾品も一緒に入れる。たぐさんの食事とチチャがふるまわれる。



クンティスーユ（西部地方）の葬式
 上等な衣装に身を包み、金銀が故人の口に置かれる。遺体は石の竈のような地下
 墓地に埋葬され、白く塗られてから色とりどりに塗られる。

第六編 インカ帝国の刑罰と祭り

PRIMER CAPITULO DELAS MOIAS ACILACOLIAS

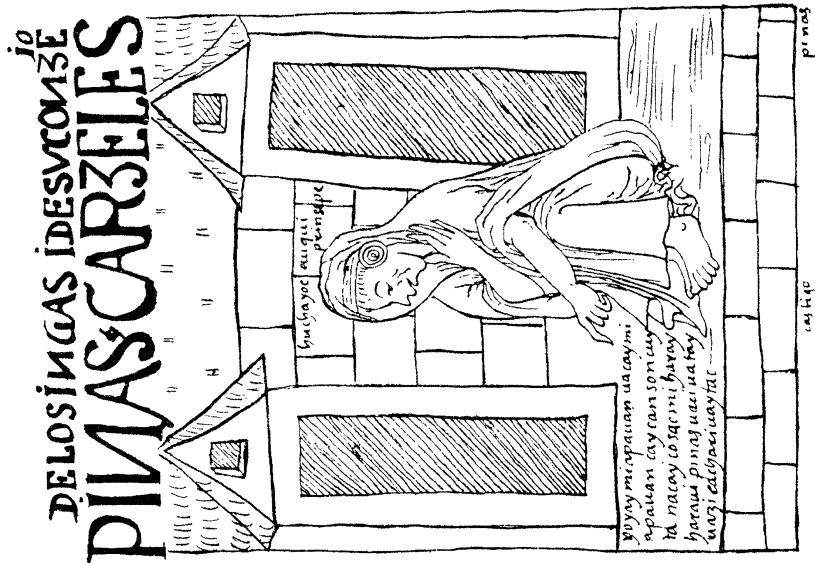


太陽の処女 (アクリヤ) インカ帝国の時代には太陽の処女 (アクリヤ) が住む家があり、そこには偶像に仕える6種類のアクリヤがいて、その他に皇帝の宿駅 (タンボ) や畑や織物に従事する6種類のアクリヤがいた。

CASTIGONSTICIA SANCACIONVICIO



インカ支配期の1番目の刑罰 悪党、裏切り者、重罪を犯した者を罰する刑罰と監獄。侵犯者を罰するために、暗い部屋に毒蛇、虎、ハゲタカ、ワシ、フクロウ、トカゲを一緒に入れた。奇跡的に生き延びた死刑囚はインカ皇帝から罪を許され、釈放された。



2 番目の判詞

欽山送りの刑を宣告された首長やインディオは牢獄に入れられ
死囚や鞭打ち、嘔つき、偽証者、怠け者、不正を犯した者、インカ皇帝に背いた
もの、遊び人、反抗的で無作法な人、といった犯罪者がいた。



姦通した男女に対する3番目の刑罰

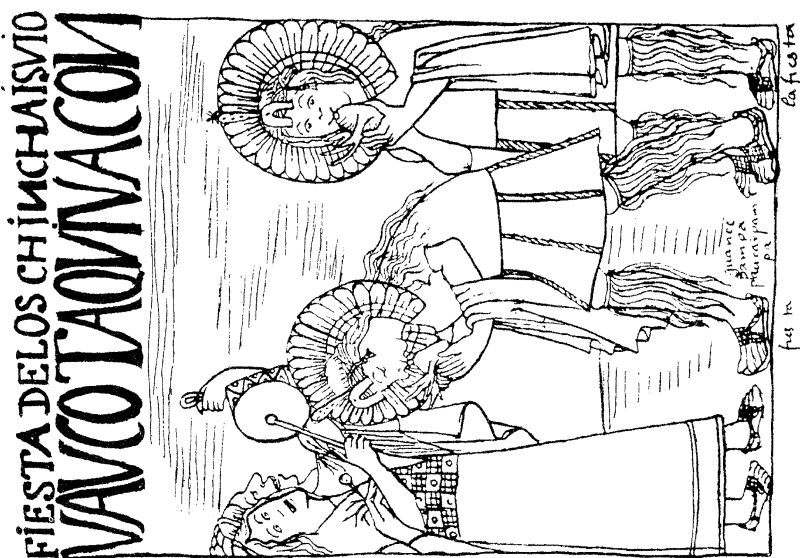
石投げによる死刑が宣告された。男性が女性を強姦した場合には、その男は死刑となり、女性性は200回の鞭打ちの刑を受け、残りの生涯を修道院で隠遁生活を送らされた。女に罪の責任がある場合は、石投げによる死刑となり、男性は鞭打ちの刑を受け、山奥へと追放された。



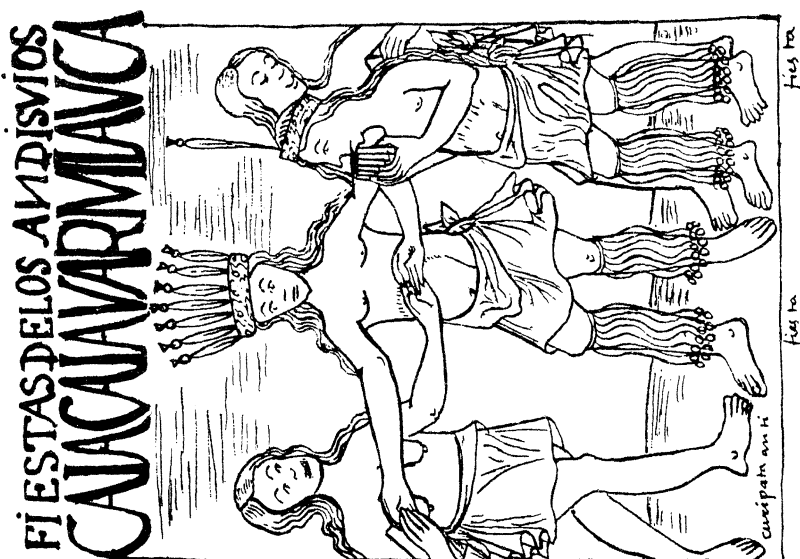
使用人の男女に対する4番目の刑罰
二人とも性交渉をもったことを認めれば、髪を吊るされ死刑となった。男性が強引に関係を結んだ場合は、男性のみが罰せられ、その逆も同様であった。この刑を受けて死を免れたとしても、その女性はその後結婚することは許されなかった。



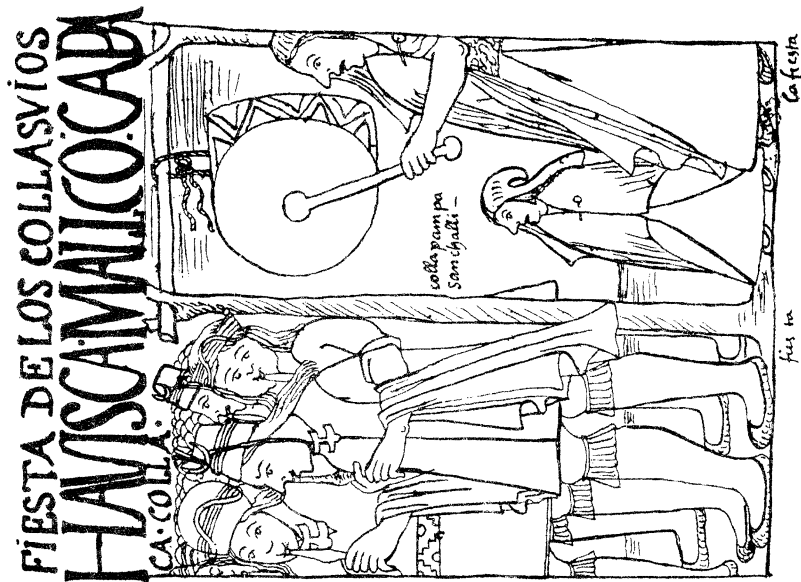
毒殺した人に対する5番目の刑罰
こうしたインディオは家族全員、子どもや孫までもが罰せられた。小さな子どもの場合は、役人がその存在に気付かなかった時だけ免れた。死刑囚は郊外に置き去りにされ、コンドルやハゲワシ、狐に食べられた。



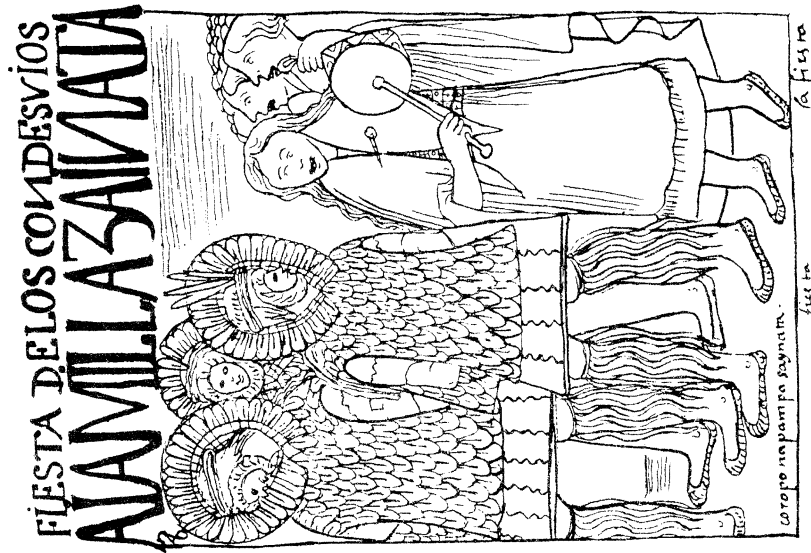
チンチャイスーユ (北部地方) の祭り
女性は大鼓を打ち鳴らしながら歌い、男性は鹿の頭の笛を吹いて応じる。クスコからキトにかけてどこも同じ様式で行われる。



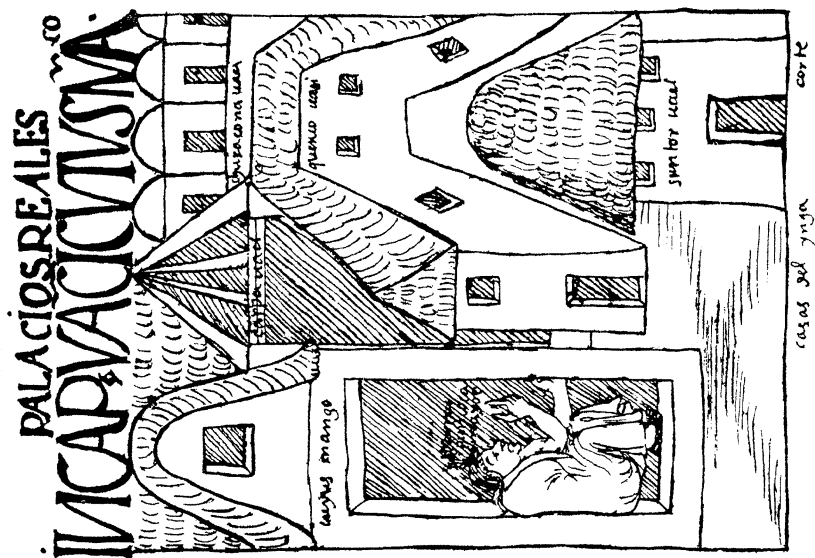
アンティスーユ (東部地方) の祭り
あまり忠誠心がない。歌って踊る。男性が歌い始めると、それに女性が応じる。手をつないで円を描きながら踊る。男性は女性と同じような格好で、弓を身につける。ほとんど裸同然である。彼らはジャングル地帯のインディオで、笛を奏でる。



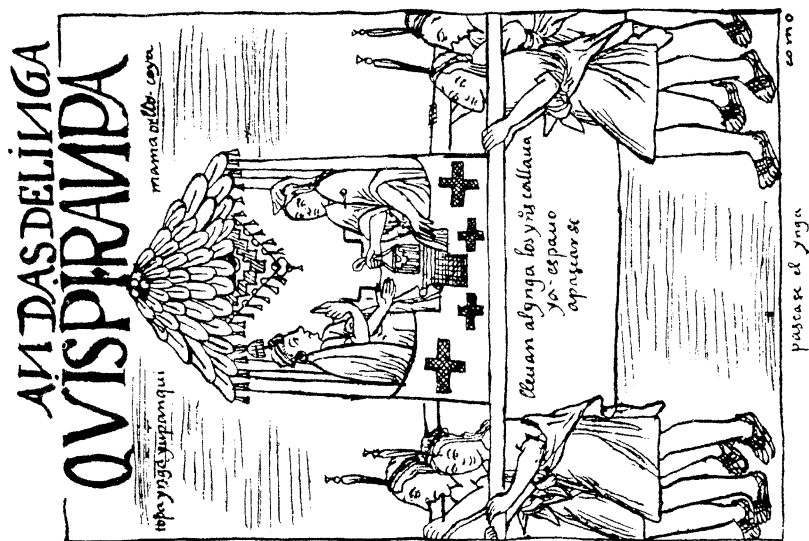
コリャスーユ (南部地方) の祭り
共同体ごとに歌があり、人々は歌い、踊る。女性が哀愁歌を歌い、男性が笛を吹く。首長も人民も全員が踊りに参加し、コラオからポトシに至る地域で行われる。



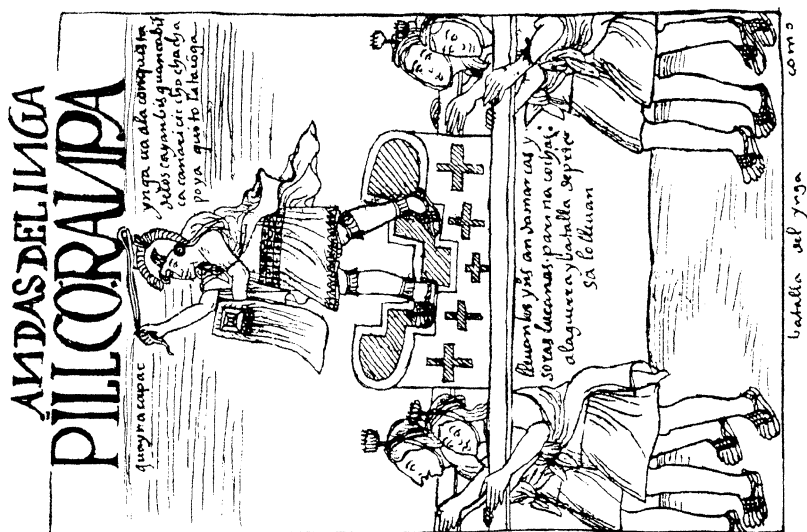
クンティスーユ (西部地方) の祭り
クスコからアレキパにかけて。歌や音楽に合わせて踊る。女性が歌い、男性が応じる。祭りは幸福と歓喜と敬意に溢れている。



王宮とインカの家
貴族は地位に応じて大きな家に住んでいた。インカの家には中庭があり、鳥や猿、オウム、インコといった鳥たちが山や森からやってくる。畑には野菜やハーブが植わっている。



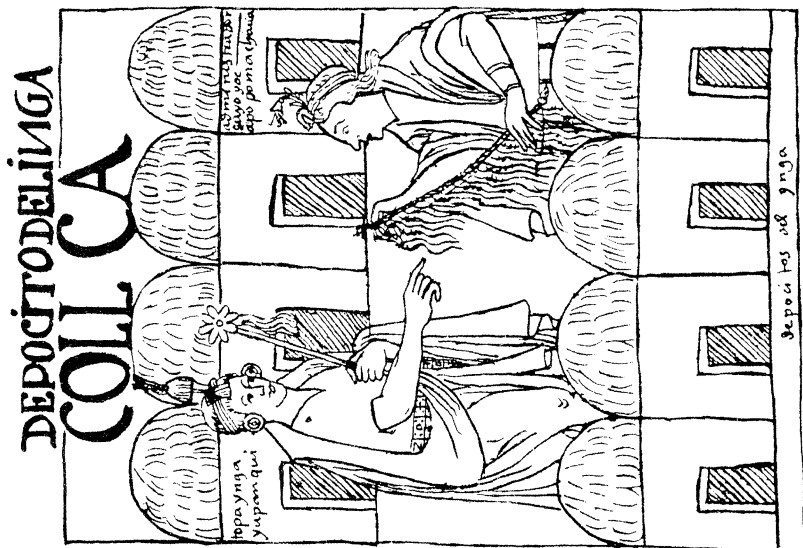
インカの興
インカ・トパ・ユパンキと王妃のママ・オクリヨがカリヤワヤのインディオに担がれ、のんびりと運ばれている。



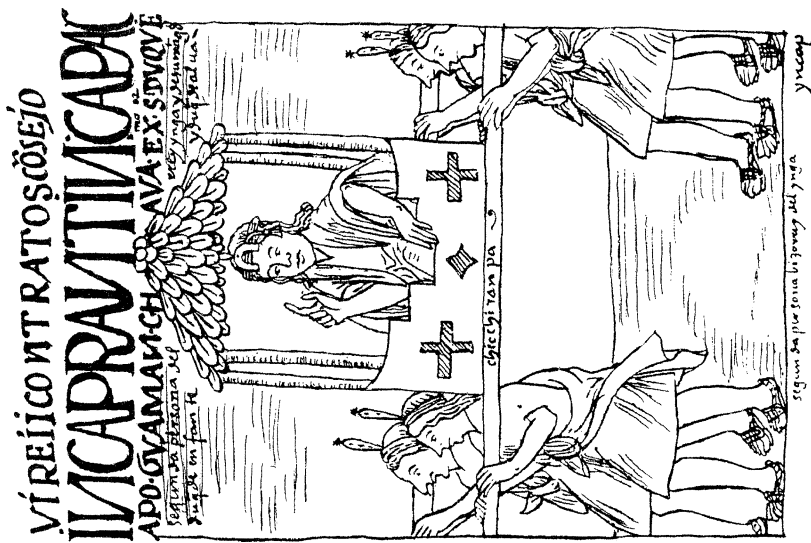
インカの興

インカは興に乗って乗ったまま敵と戦い、石投げ器（オングダ）で金の石を発射する。ワイナ・カパック王はカヤンベ、ラタクンガ、チャチャボヤス、キト、ラタクンガを征服した。アングダマルカとソラスのインディオが敏速にインカを戦へと運ぶ。

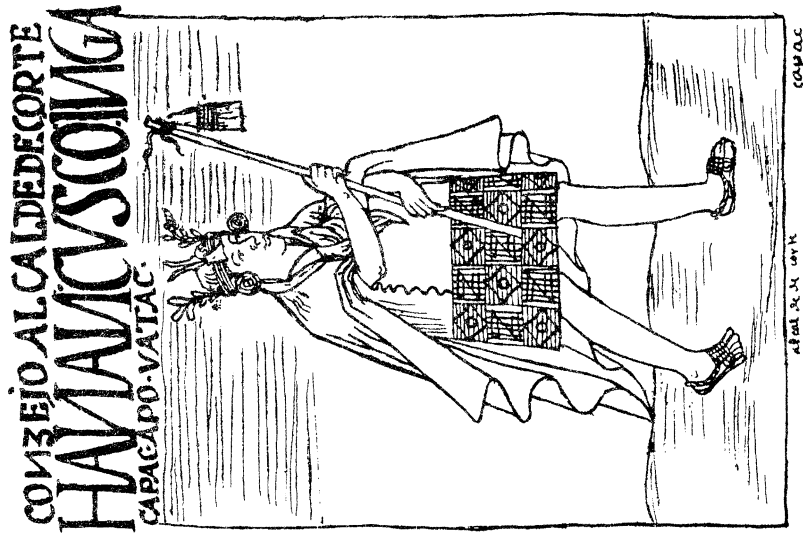
第七編 インカ帝国の行政官と巡察使



インカ・トパ・ユパンキの倉庫
 国中の各州には「コルカ」という倉庫があった。地域によってさまざまな生産物が貯蔵されていた。乾燥ジャガイモ、毛、干した肉、トウモロコシ、スイートポテト、唐辛子、綿など内陸から沿岸部にいたる多種多様な産物が倉庫に貯蔵され、戦争や飢饉の時、人々に配分された。

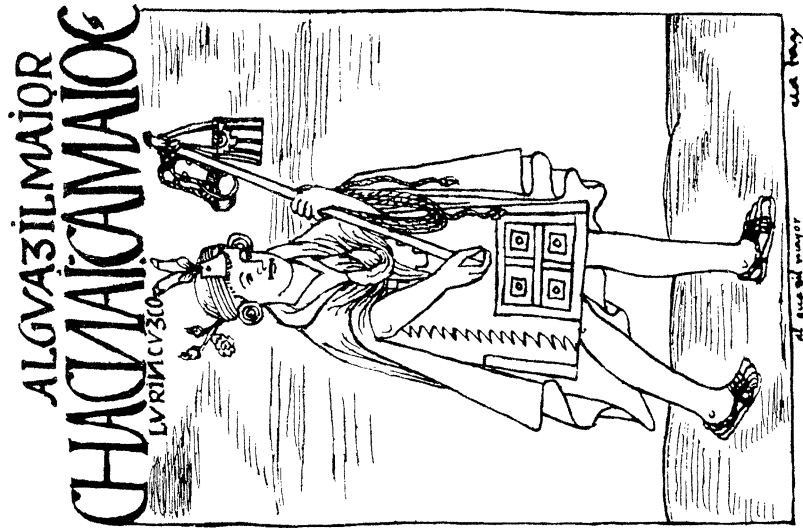


インカの副王カパック・アボ・グアマン
 この本の著者の祖父である。彼はインカ・トパ・ユパンキの代理である。インカはインカ貴族だけを行政官として選定し、けて身分の低い者を選ぶことはない。



評議員, 市長, 裁判官

カパック・アボ・バタックはインカに反抗的な権力者を逮捕しに行く。役職の象徴として「マスカ・バイチャ」(王の印)を身につけている。その権力者は捕えられ、インカと評議員の前に引き出され、罰せられる。



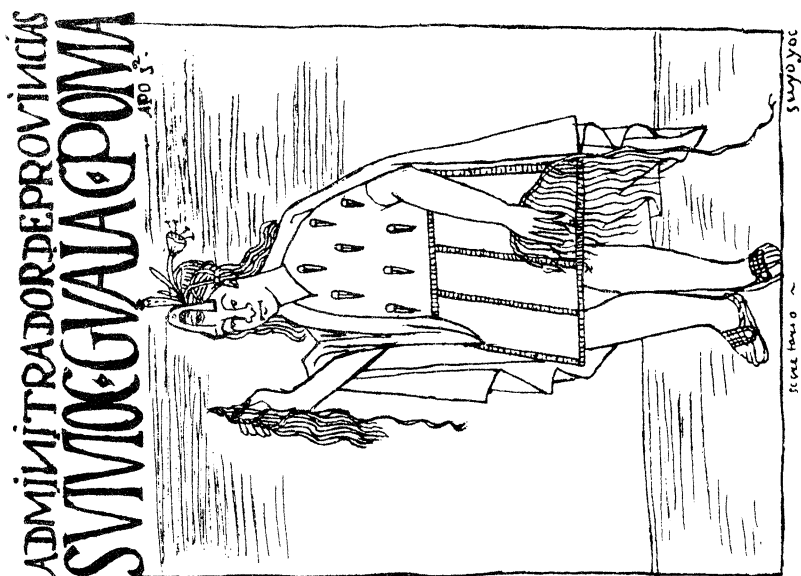
保安官

貧しいインディオはこの役職には就けず、インカの非嫡出の息子や従兄弟が任命される。役職を表す印として「チュスバ」(袋)を持ち、インカのサンダルを履く。インカと評議員の命令で行動する。



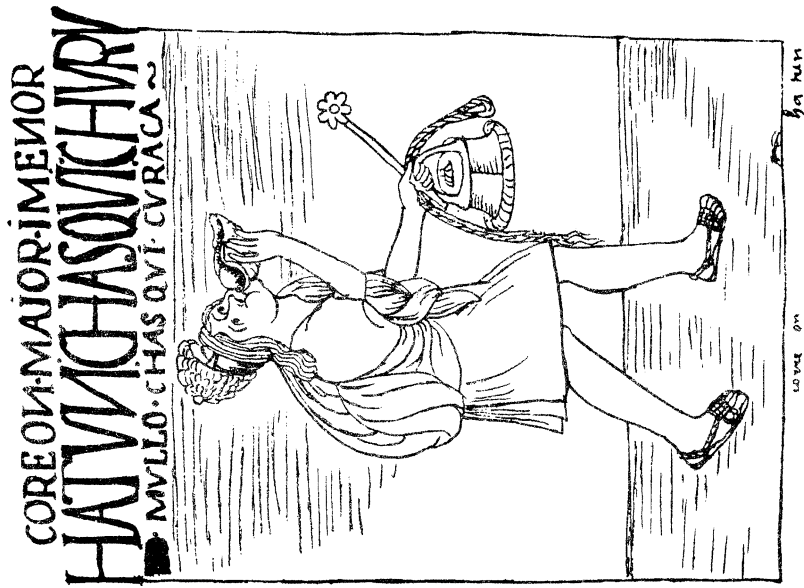
地方官俵, 裁判官

この役職には、耳を損傷した人や早口で足の不自由な人、あるいは歯が欠損した者が選ばれる。戦場に送ることができないので、インカの役には立たないからである。彼らはインカの非嫡出の息子、孫、ひ孫だった。各州に派遣され、裁判を遂行し、誰からも掠奪せず、彼らを非難する人はいなかった。



地方行政官

有力者の息子が就任した。共同体の畑、食料、衣服、家畜、鉱山を巡察するのが仕事である。また人々の紛争を避け、正義を買かなければならない。



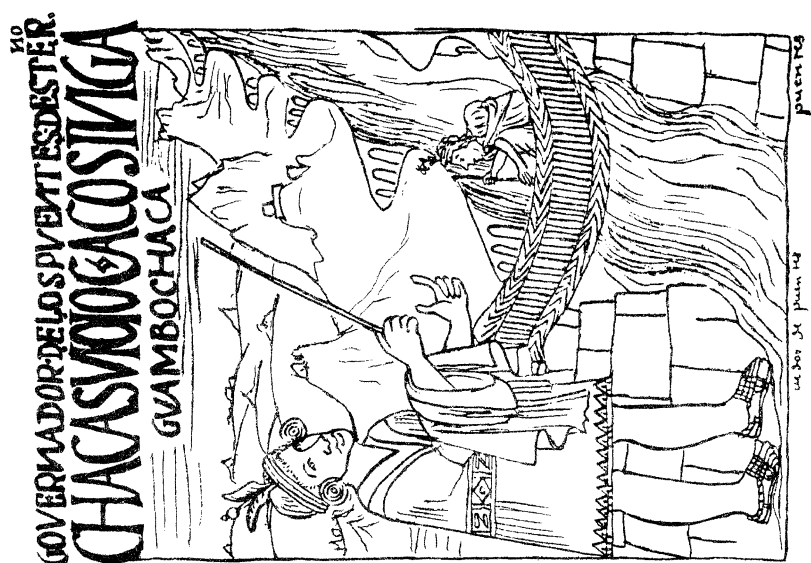
チャスキ (飛脚)

誠実で寛大なインカ司祭の息子に就いた。頭には白い羽をのせていたので、遠くからでも見えた。到着を知らせる巻貝「ブツツ」も持ち歩いていた。奴隷や鷹のようには敏速に動かなければならなかった。昼夜を問わない仕事で、1か所に滞在することもないので、妻子を持つことはできなかった。



建設技師と測量技師

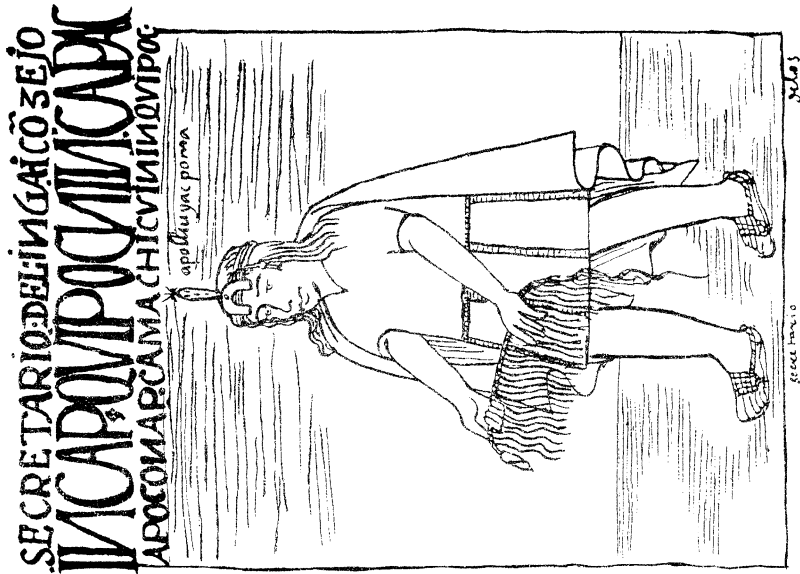
トパ・ユパンキの命令によって、各州や共同体を測量し、標石を設置した。草原、牧草地、用水路、薪が分配され、誰にでも差別することなく与えられた。



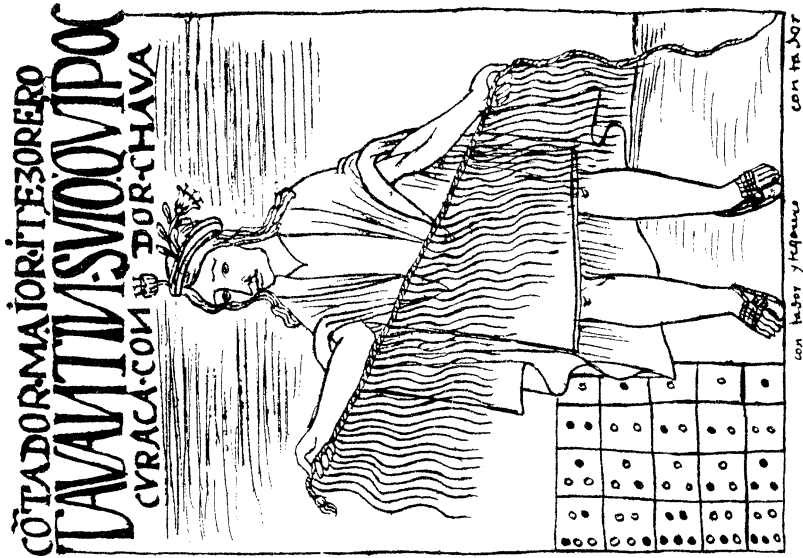
橋の管理、保全に責任を持つ役人インカ時代には川の大きさによって大小の橋があった。必要ときには、舟でも川を渡った。



インカ王道の管理、保身に責任を持つ役人インカ時代には6つの主要な王道があった。道幅は広く、よく手入れされ、きれいに清掃されていた。旅行者が泊まる宿場(タンブ)があり、飛脚(チャスキ)は王道を利用して国中に情報を伝えた。



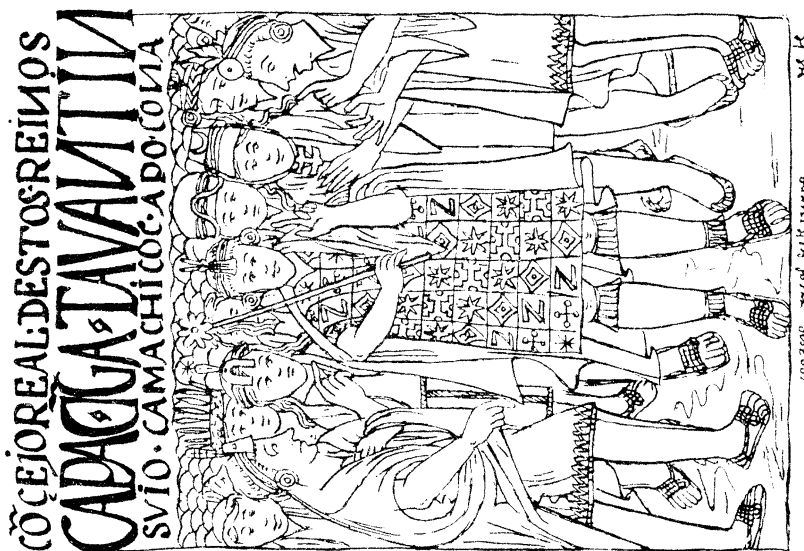
インカと評議員の書記官 (キープ・カマヨック)
インカ王朝時代の出来事を記録する方法として、色の異なるキープ (結縄) を用いた。その地方の出来事を記録する書記官と、インカの重要な情報を記録する王族の書記官がいた。



会計、計理の役人、コンドル・チャウア (キープ・カマヨック)
インカ帝国の様々なものを数えて記録するすばらしい能力を持っていたらしい。すべての市、町、共同体には、経済活動や人口動態を記録する役人がいた。

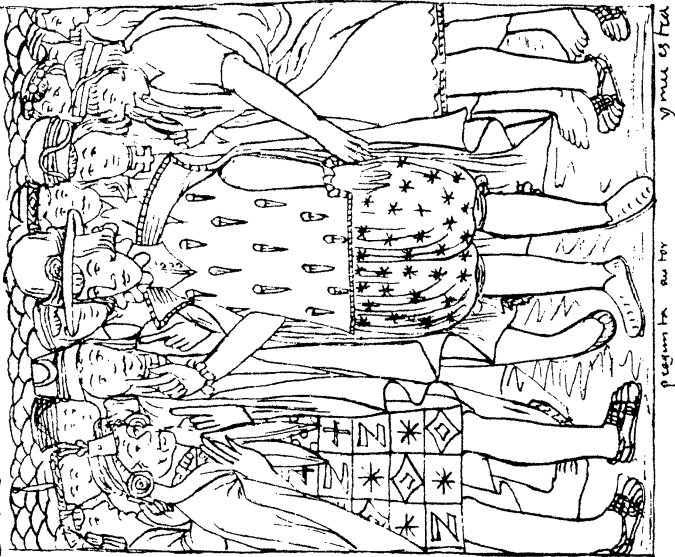


巡察使 (トクイリクック)
インカ帝国の役人で、各地方を巡視して、宿駅(タンボ)、食料貯蔵庫、修道院、共同体、神殿を見て回った。法が順守されているかどうか調べ、不正があった場合にはその地方役人の言動がインカに伝えられた。



インカ王室評議会
インカ帝国の首都クスコに居住し、インカ王族がその地位を占め、父から息子へと継がれていった。インカは他のインディオと直接会話することはなく、通訳などを介して意思疎通した。インカは貧民、孤児、未亡人のために正義を尽くした。

~PREGVIA·ELAVTOR NAVILLAVACHAMITAMA



質問を受ける著者グアマン・ボマ
キリスト教徒の指導者で、キリスト教の掟をくまなく見てきた。これまでイン
ディオが欲深く金銀に執着するのを見ることがない。嘘つき、詐欺師、売春婦、
泥棒も見ることがない。それにひきかえスペイン人は、両親、司祭、国王に従順
ではなく、貧しいインディオから掠奪し、返すと言いつつ返ってきた物は一つ
もない。